



P.10  
文学

P.22  
コラム：台湾文学研究

P.24  
エンタテインメント

P.30  
コラム：台湾の漫画

P.34  
建築と文創



## 台湾文学 翻訳の黄金時代

—案内人—  
大東和重



大東和重 おおひがし・かずしげ  
関西学院大学法学部教授

専門分野は日中比較文学、台湾文学、とくに台南の文学。台南を描いた書籍で好きなのは、王育徳『昭和』を生きた台湾青年』（集英社文庫、2021年）、辛永清『安閑園の食卓』（集英社文庫、2010年）、前嶋信次『(華麗島)台湾からの眺望』（東洋文庫、2000年）。台南の街は、何も知らずに歩いて楽しんでいる。いろんな本を読んでから訪ね、迷路のような路地を歩くと、土地の精霊が心の中にしび込んでくる。とくに台南と食べもの、そして人。怖いほど光があふれる青い空と白い入道雲を、早く見に行きたい。次に台南を訪ねるとき、南国の日差しの下で再び口にする食べ物は、どれもとびきりの味がするだろう。

### 主な著書

- 『台湾文学——日本統治期台湾・台南の日本人作家群像』関西学院大学出版会、2015年
- 『台湾の歴史と文化——六つの時代が繰り返す「美麗島」』中公新書、2020年

いま、台湾文学の翻訳は、黄金時代を迎えている。21世紀に入り、台湾が身近に感じられるようになった。かつては、飛行機でわずか2、3時間の距離にもかかわらず、限られた情報しかなかった台湾。いまでは、この複雑で魅力ある土地を知る手段として、また文学の新たな領土として、台湾文学が盛んに紹介されている。

台湾文学は、およそ1990年代まで、中国文学の一部として紹介されていた。JICC出版局の翻訳シリーズ「発見と冒険の中国文学」では、『バナナポット——台湾文学への招待』（山口守・監修、1991年）の巻に、白先勇や黃春明ら、戦後を代表する作家の短篇が収められた。またこれに先立って、1980年代以降、文学をとおして政治や現状を知ることに重点を置いた、研文出版の「台湾現代小説選」全5巻が刊行されている。李喬や陳映真らの作品を多く収め、台湾民主化の歩みを知ることができる。

大きな転換点は、1990年代末から刊行の始まった、国書刊行会の『新しい台湾の文学』全12巻である。白先勇『台北人』（山口守・訳、2008年）や李昂『自伝の小説』（藤井省三・訳、2004年）、朱天心、朱天文、李喬、SFの張系国など、台湾文学を代表する作家たちの小説が、斬新な装丁で登場した。藤井省三、山口守、黄英哲の諸氏が編集委員や訳者を務めたこのシリーズの登場は大きな刺激となり、その後の台湾文学紹介の地ならしをした。

2000年代に入ると、台湾文学の各領域に特化した翻訳シリーズが出る。台湾は小さな島だが、民族の構成は複雑である。漢族が中国大陸から渡ってくる前に、先住民である「原住民族」がいた。『悲情の山地——台湾原住民族小説選』（呉錦発・編著、下村作次郎・監訳、田畑書店、1992年）を先駆として、その文学を紹介したシリーズ、草風館の「台湾原住民族文学選」全10巻が刊行され、ワリス・ノカン、シャマン・ラボガン、リカラッ・アウーらが収録された。シャマン・ラボガンの小説はその後も、『大海に生きる夢——大海浮夢』（下村作次郎・訳、草風館、2017年）など数多く訳

されており、パタイの歴史小説『タマラカウ物語』（魚住悦子・訳、草風館、2012年）も見逃せない。

平地の先住民族である「平埔族」を描いた小説には、葉石濤『台湾郷土文学選集4 シラヤ族の末裔・潘銀花』（中島利郎・訳、研文出版、2014年）や王幼華『土地と靈魂』（石其琳・訳、中国書店、2014年）がある。最近では台湾最南部を舞台に、平埔族を含むさまざまな民族が入り乱れる歴史絵巻、陳耀昌『フォルモサに咲く花』（下村作次郎・訳、東方書店、2019年）が翻訳された。

同じ漢族でも、多数派の福建省南部から来た「閩南人」に対し、広東省東北部から来た「客家人」は、独自の文化を継承する。その文学を訳したのが、未知谷の刊行する「客家文学の珠玉」全4巻で、鍾肇政や李喬、利玉芳らが収録された。戦後台湾にやってきた「外省人」の文学としては、沿々たる人生の回顧、齊邦媛『巨流河』（池上貞子・神谷まり子・訳、作品社、2011年）、聶華苓『三生三世——中国・台湾・アメリカに生きて』（島田順子・訳、藤原書店、2008年）がある。

かつて海外の華僑の留学先だった台湾には、留学生が多く集まった。人文書院の「台湾熱帯文学」全4巻は、マレーシアの中華系出身で台湾在住の作家、李永平、張貴興、黃錦樹らの斬新で先鋭的な小説を収める。

台湾は民族的に多様なだけではない。文化的な多様性はLGBT文学において大きな収穫を見た。作品社の「台湾セクシュアル・マイノリティ文学」全4巻は、代表的作家の即妙津や紀大偉らの小説や評論を収める。名古屋の出版社、あるむが刊行する「台湾文学セレクション」既刊4巻も、洪凌、胡淑雯、郭強生らのセクシュアリティの問題を問う力作を収める。

少し時代をさかのぼるが、1970年代の台湾文学は「郷土文学」の時代だった。それらをまとめて紹介した、研文出版の「台湾郷土文学選集」全5巻は、戦後文学の出発点と言っていい鍾理和や、北部と南部の両文壇をそれぞれ牽

引した長老作家、鍾肇政と葉石濤をはじめとする小説を収める。

台湾文学が広く知られるうえで、若くして逝去した天野健太郎氏の訳業は大きい。天野氏の訳した呉明益『自転車泥棒』（2018年）は文藝春秋から出たが、同社からはこれ以降も、張淑敬『ブラックノイズ 荒間』（倉本知明・訳、2021年）などの翻訳が出ている。台湾文学を収める外国文学のシリーズには、白水社の「エクス・リプリス」があり、呉明益と並んで現代台湾文学を代表する、甘耀明の『鬼殺し』（白水紀子・訳、2016年）や、王聰威『ここにいる』（倉本知明・訳、2018年）などを収める。

台湾は詩人の島でもある。国書刊行会の「シリーズ台湾現代詩」全3巻は、楊牧や余光中、鄭愁予といった、戦後台湾を代表する詩人の翻訳を収める。一方、思潮社の「台湾現代詩人シリーズ」既刊15巻は、一詩人に1冊を当て、『禅の味——洛夫詩集』（松浦恒雄・編訳、2011年）、『越えられない歴史——林亨泰詩集』（三木直大・編訳、2006年）、『契丹のバラ——席慕蓉詩集』（池上貞子・編訳、2009年）、『あなたに告げた——陳育虹詩集』（佐藤普美子・編訳、2011年）など、台湾の誇る詩人たちの翻訳をずらりと並べる。

人気作家としてかつて他の追随を許さなかったのが、瓊瑤で、自伝的な『我的故事——わたしの物語』（近藤直子・訳、文藝春秋、1993年）などが訳されている。ベストセラー作家、三毛の『サハラに歳月』（妹尾加代・訳、石風社、2019年）は新訳が出た。探偵小説では、藍碧『錯誤配置』（玉田誠・訳、講談社、2009年）、寵物先生『虚擬街頭漂流記』（同訳、文藝春秋、2010年）、胡傑『ぼくは漫画大王』（稲村文吾・訳、文藝春秋、2016年）、最近では紀蔚然『台北プライベートアイ』（船山むつみ・訳、文藝春秋、2021年）が出ている。

ノンフィクションとしては、ひまわり学生運動の記録でもある、傅榆『わたしの青春、台湾』（関根謙・吉川龍生・監訳、五月書房新社、2020年）、李玖萱ほか『私がホームレスだったころ——台湾のソーシャルワーカーが支える未

来への一步』（橋本恭子・訳、白水社、2021年）、黄インイク『緑の牢獄——沖繩西表炭坑に眠る台湾の記憶』（黒木夏兒・訳、五月書房新社、2021年）、エッセイでは、詩人焦桐の『味の台湾』（川浩二・訳、みすず書房、2021年）が訳されている。

忘れずにおきたいのが、戦前に日本語教育を受け、日本兵として南方で戦い、戦後中国語で執筆した陳干武である。『暗幕の形象——陳干武詩集』（三木直大・編訳、思潮社、2006年）や『台湾人元日本兵の手記 小説集『生きて帰る』』（丸川哲史・訳、明石書店、2008年）はいまこそ手にとりたい。

戦前日本の植民地だった台湾には日本語で創作する作家たちがいた。戦後になると、邱永漢のように日本の文壇で活躍する作家が出てくる。現在、台湾にルーツを持ちつつ、日本で生まれ育った、温又柔氏や東山彰氏らの活躍があり、台湾各地を語るエッセイには一青妙氏がいる。一方、台湾出身で日本語を用いて創作する李琴峰氏は『彼岸花が咲く島』（文藝春秋、2021年）で芥川賞を受賞した。戦前から戦後、現在にかけて、時代背景は変化しつつも、日本語で書かれた「台湾文学」が存在する。これも台湾文学の多様性のひとつだと言える。

台湾文学を紹介する最新のシリーズには、作品社の「台湾ブックカフェ」全3巻があり、台湾文学の翻訳を支えてきた白水紀子氏や池上貞子氏による女性作家集や中編小説集がある。書肆侃侃房の「現代台湾文学選」既刊2巻も見逃せない。徐嘉澤『次の夜明けに』（三須祐介・訳、2020年）や黄崇凱『冥王星より遠いところ』（明田川聡士・訳、2021年）のような意欲作を収め、今後の展開が楽しみである。

長く台湾文学の翻訳を支えてきた手練れの訳者たちに敬意を表するとともに、気鋭の訳者が訳書を続々世に送り出している現状を慶びたい。こんな黄金時代が来ると、21世紀を迎えるまで、誰が予想したのだろうか。

## 『わが青春の台湾 わが青春の香港』

邱永漢

中公文庫 2021年 ¥990  
ISBN : 9784122070660



財テクで一世を風靡し、金儲けの神様として知られた邱永漢が、驚くべき半生を振り返った1冊。

1924年、日本統治下の台南に、台湾人の父、日本人の母の間に生まれた邱永漢は、幼くして目から鼻へ抜けるような秀才だった。当時、日本人の子どもは小学校へ、台湾人は公学校へ通ったが、選ばれて小学校を卒業した邱は、全島から選りすぐりの英才が集まる、旧制台北高校の尋常科（現在の中学高校に相当）に学び、さらに東京帝国大学へと進む。

しかし戦争の時代は容赦なく邱永漢の人生を翻弄する。戦後に故郷で騒乱を目にした邱は、身の危険を覚え、香港へと逃げ去る。本書には、戦前から戦後の、激動の台湾・東京・香港を背景に、自らの才覚ひとつで人生を切り拓く人生が描かれる。

この回想には、波瀾の人生に重ね合わせて、台湾の社会や現代史が、目に浮かぶように描かれている。台湾語を使って商売していた生母の記憶に始まり、料理上手だったもうひとりの台湾人母の思い出。邱家は旧式の大家族で、父には複数の妻がいた。成長の過程では、エリート

としての自負を持つとともに、台湾人への差別待遇を痛感する。

さらに、1947年に起きた、戦後台湾の大事件である「二・二八事件」の体験や、国民党政府による弾圧の中での、台湾独立運動への関与、そして裸一貫で渡った香港での、生きるための格闘など、間にはさまれた、台南や香港の街の描写は、台南・香港好きにはたまらない。

台湾時代については、同じく台南に生まれ、幼馴染でライバルだった、王育徳『昭和』を生きた台湾青年——日本に亡命した台湾独立運動者の回想 1924-1949』（草思社文庫、2021年）を、戦後の香港時代については、直木賞受賞作『香港・濁水溪』（中公文庫、2021年）をあわせて読んでいただきたい。

物語は自転車を盗まれる話から始まる。主人公の母親の口癖は、「鐵馬のせいで、家族の運命が変わった」というもの。「鐵馬」とは台湾語で自転車を指し、かつては高級車のごとき存在だった。

戦争中には、母が日本人警察官の自転車を盗んだおかげで、警察官が命拾いした。しかしこの泥棒ゆえに、祖父は命を落とす。そして自転車を3台も失った父は、やがて蒸発する。そして20年後、父愛用の自転車が、主人公のもとに戻ってくる。

年代物の自転車を修理し、その来歴をたどると、戦前から戦後にかけての台湾という土地に刻まれた記憶の数々がよみがえってくる。台湾の先住民が南方の激戦地に送られた、高砂義勇隊。少年たちが動員されて日本内地の工場で戦闘機をつくらされた、台湾少年工。

ほかにも、マレー半島を攻略した日本軍の銀輪部隊や、ビルマの森を転戦した国民党の兵隊、国民党につき従って台北の動物園まで来た象など、「鐵馬」をめぐる物語は尽きない。まるで手品のように、台湾の戦中戦後をいどるエピソードの数が紡ぎ出されてくる。

巧みに台湾という素材を物語化する呉明益の小説は、現在続々と翻訳が出ている。長篇小説には、『複眼人』（小栗山智・訳、KADOKAWA、2021年）、『眠りの航路』（倉本知明・訳、白水社、2021年）があり、短篇小説集には代表作の『歩道橋の魔術師』（天野健太郎・訳、河出文庫、2021年）、『雨の島』（及川茜・訳、河出書房新社、2021年）がある。呉明益を最初に日本へと紹介した、訳者の天野健太郎氏は若くして逝去した。しかしその翻訳はいつまでも読み継がれることだろう。

## 『自転車泥棒』

呉明益／天野健太郎・訳

文春文庫 2021年 ¥1,155  
ISBN : 9784167917586



## 『台湾男子簡阿淘』

葉石濤／西田勝・訳

法政大学出版局 2020年 ¥3,080  
ISBN : 9784588490378



1947年、台湾では「二・二八事件」という大きな事件が起きた。戦争に敗れた日本は植民地の台湾から去り、かわって中国大陸から来た国民党政府が台湾を回収した。ところが、腐敗した政府の乱脈な政治は、台湾の民衆に大きな不満を引き起こす。その結果起きた衝突が二・二八事件で、無辜の台湾人が数多く虐殺された。戒厳令下の1950年代以降も、無実の台湾人が逮捕投獄される「白色テロ」がつづき、大きな傷跡を残した。

葉石濤自身、'50年代に冤罪で逮捕され、獄中生活を送った被害者のひとりである。1925年、台南に生まれた葉は、試験などそっちのけで読書にふける文学少年だった。日本語での創作を始め、台北で雑誌編集の手伝いを経験してから、故郷に戻り、小学校の先生をしつつ、文学の活動をしていた。そんな中、二・二八事件を目にし、さらに白色テロに遭う。

自身の経験をもとに創作されたのが、本書である。小説の形をとり、葉石濤ならではのユーモアが随所に散りばめられているが、本書は自らの傷を癒す過程であるとともに、白色テロで横死を遂げた人々への鎮魂歌でもある。

出獄した葉石濤は、僻地の小学校教師をしながら、やがて1960年代から、今度は中国語での創作を開始する。台湾に根差した文学の確立を目指した葉は、小説だけでなく評論でも活躍し、南部文壇の重鎮として尊敬を集めた。

葉石濤の翻訳にはほかに、台湾の平地先住民である平埔族のひとつ、シラヤ族の女性を主人公とした連作小説を収める、『台湾郷土文学選集4 シラヤ族の末裔・潘銀花』（中島利郎・訳、研文出版、2014年）があり、文芸評論家としての代表作も、『台湾文学史』（中島利郎・澤井律之・訳、研文出版、2000年）として訳されている。

台湾は詩人の島である。詩をつくり、詩集を出す人が数多くいる。日本で俳句や短歌をつくる人口が膨大なことを思えば不思議はないが、それにしても友人知人からよく詩集をもらう。台湾では文学青年を「文青」と呼ぶが、文学を愛する「文青」たちは、詩をつくり、小説や散文を書き、本やネットで伝えることに熱心である。

台湾の詩の歴史は古典詩に始まり、日本統治期には中国語や日本語の詩が、戦後には中国語、のちには台湾語の詩がつけられた。詩人たちはグループをつくり、新聞の文芸欄に詩を載せ、雑誌を発行し、詩集を出し、お互い励まし合いながら詩の世界をつくってきた。台湾の人口は約2300万、日本の5分の1にすぎないが、街中に書店は多く、新刊も棚にあふれている。その世界を支えているのが、詩人たちである。

本詩集の書き手は精神科医の詩人で、人と人のつながりを、孤独、青春、季節、風景、何よりも追憶の中で描く。技巧を凝らした詩を見事な日本語へと翻訳したのが、訳者の及川茜氏である。本書や、超絶技巧で訳された、唐捐『誰かが

家から吐きすてられた ——唐捐詩集』（思潮社、2014年）の2冊は、ともに思潮社の「台湾現代詩人シリーズ」から出ている。

読みごたえのある解説とともに、本を手にとってご堪能いただきたいが、1篇、短い詩を引用する。題は「火花が空に躍り、噴水が交叉する」。

ああ、こんなに長く耐えて  
大海の見事な風景を支え抜いた  
きみも小さな鯨ネジ

## 『Aな夢』 台湾現代詩人シリーズ16

鯨 向海／及川茜・訳

思潮社 2018年 ¥2,530  
ISBN : 9784783727842





## 『フォルモサに咲く花』

陳耀昌／下村作次郎・訳

東方書店 2019年 ¥2,640  
ISBN : 9784497219169



台湾南部、現在はリゾート地となっている墾丁を舞台に展開する、一大歴史絵巻。

19世紀半ばの台湾は、海外へ向けて貿易港が開かれ、欧米の外交官や宣教師、探検家たちが訪れる場所となっていた。1867年、台湾最南端の岬で、米国人の乗った商船が座礁し、船客や乗員らが台湾の先住民族によって殺害される事件が起きる。

この土地には、山中や平地に住む先住民族、中国から来た開拓民の漢族が、混じり合うようにして住んでいた。先住民族と漢族の間に生まれた、蝶妹と文丞の姉弟は、事件をきっかけに、それぞれ異なる運命をたどることになる。

台南や高雄、廈門にいた西洋人たちを含め、数多くの登場人物たちが織り成す歴史物語は、台湾という土地の由来を表現している。もともと台湾には、「原住民族」と現在呼ばれる山地や東海岸に住む先住民族、「平埔族」と呼ばれる平地に住む先住民族がいた。そこに、17世紀にオランダが来航して拠点をつくる前後から、福建省南部から「閩南人」、広東省東北部から「客家人」と呼ばれる漢

族がやってくる。

本書に描かれた時代、これらの民族は互いに交渉し、ときに通婚しながら、再来した西洋人と接しはじめていた。この台湾という土地の民族的複雑さを、小説として力業で描き出したのが、大作『フォルモサに咲く花』である。

2021年には、台湾では本書を原作とする壮大なテレビドラマ『斯卡羅 SEQUALU』が放映された。これは台湾の民族的叙事詩でもある。

訳者の下村氏は、台湾原住民族文学の翻訳の第一人者である。訳書には、戦前の1930年に起きた霧社事件のルポルタージュ、鄧相揚『抗日霧社事件の歴史——日本人の大量殺害はなぜ、おこったか』(魚住悦子との共訳、日本機関紙出版センター、2000年)や、先住民族の代表的作家のひとり、シャマン・ラボガン『空の目』(草風館、2014年)など数多くある。

## 『ブラックノイズ 荒聞』

張渝歌／倉本知明・訳

文藝春秋 2021年 ¥1,980  
ISBN : 9784163914176



日本語に訳される台湾文学の多くは、いわゆる「純文学」が多い。しかし台湾で多くの読者を持つのは、日本と同じく、いわゆる文学に属さない小説である。医師であり、推理小説家、脚本家として活躍する、1989年生まれの本著者のホラー小説は、読み出すとやめられない。

失敗つづきの人生を送ってきた中年のタクシー運転手・呉と、清掃の仕事をしている妻の郭。ふたりのともに、古いテープから、あるいは幻聴として、日本語の混じった不思議な声が聞こえてくる。そのノイズのような声の中に、「ミナコ」という日本人の名前があった。

声は誰からの、何の呼びかけなのか。あやまって客に大やけどを負わせてしまった妻の郭は、幻聴に悩まされ、夫の暴力を受け、怪我をして入院する中、首をひねられた死体となって発見される。夫の呉は、やがて声を追って、台湾の中央山脈へと分け入るが……。

物語には日本統治時代の記憶や、先住民族である原住民族の古い信仰、漢族の民間信仰などが組み込まれ、またそこに現在の台湾を生きる、ごくありふれた登場人物たちの姿があって、台湾社会のい

まを知るにも恰好の小説である。何より、伝統信仰のもとづく、得体の知れない恐怖が、明るい南国の台湾イメージを突き崩す。

台湾文学翻訳の名手、倉本知明氏の手になる本書は、まるで初めから日本語で書かれたかのように読める。倉本氏の翻訳にはほかに、蘇偉貞『沈黙の鳥』(あるむ、2016年)、伊格言『グラウンド・ゼロ——台湾第四原発事故』(白水社、2017年)、王聰威『ここにいる』(白水社、2018年)、呉明益『眠りの航路』(白水社、2021年)があり、いずれも読みごたえ十分。

台湾人の母と、日本人の父との間に、日本で生まれ育った桃嘉は、大学卒業後すぐ、プレイボーイの聖司と結婚する。しかし桃嘉は聖司との間に、じっくりこないものを感じていた。

台湾の家庭料理である魯肉飯は、桃嘉が母からつくり方を教わった味。しかし夫は、それを受け入れようと、理解を示そうともしない。溝は深まり、やがて桃嘉は夫の不実の決定的な証拠をつかんでしまう……。

小説の時間は、桃嘉の結婚生活、台湾人の母雪穂の子育て、桃嘉の台湾旅行といった具合に、行き来しつつ語られる。日台間に、行き違いをくり返しながらも築かれた、愛情あふれる小さな家庭。それを象徴するのが、母がつくり、父と娘が好む、魯肉飯だった。ありふれた家庭料理に見えて、そこには代々の台湾人がつないできた食の文化があり、また口にする人に対する細やかな感情がある。

繊細な心の持ち主たちが、支え合いつつも自らの生き方を模索する物語を読むと、19世紀にイブセンの戯曲『人形の家』のヒロイン・ノラが提示した、家庭による束縛と女性の自立というテーマが、

21世紀になってもなお色褪せていないことに気づかされる。台日の間に生まれた桃嘉は果たしてどんな選択をするのだろうか？

傷つきやすい心を寄せ合う人々を励ます、あたたかい筆致の温氏には、小説『來福の家』(白水Uボックス、2016年)、エッセイ集『台湾生まれ日本語育ち』(白水Uボックス、2018年)などがある。

## 『魯肉飯のさえぎり』

温又柔

中央公論新社 2020年 ¥1,815  
ISBN : 9784120053276



琴峰は、『独り舞』(講談社、2018年)で群像新人文賞優秀作、『ポラリスが降り注ぐ夜』(筑摩書房、2020年)で芸術選奨文部科学大臣新人賞、本作で芥川賞を受賞した。ますますの活躍が期待される作家である。

## 『彼岸花が咲く島』

李琴峰

文藝春秋 2021年 ¥1,925  
ISBN : 9784163913902



彼岸花が咲く島は、遠く南の海にある。孤島に流れ着いた少女に向かい、島の少女が語りかける言葉は、「リー、海の向こうより来たダー!」といった調子の〈ニホン語〉。一方、記憶を失った少女の言葉は、「あなたたちがはなしているのは、なにことば?」と、すべてがひらがなで記される(ひのもとことば)。

漂泊の少女は、島の少女らとの交流から、島の生活、習慣、外の世界との関係、さらに残されたもうひとつの言葉である〈女語〉の存在を知る。沖縄県の八重山諸島に行ったことのある人なら耳にしたことのあるだろう哀しい旧慣、中国語を知る人なら部分的に理解できる島の言葉、なぜか存在感の薄い島の男たち。そもそも少女はどこから来たのか。

謎の数々はこの島の成り立ちとかかわっていた。やがて少女たちは、高齢のノロたちに導かれつつ、この島の来歴と向き合う。彼岸花は、病を癒す薬であるとともに、外貨を稼ぐクスリでもある。島をとりまく争いの世界をよそに、この不思議なユートピアで、彼岸を超えて咲きつづけていた。

日本語で旺盛な創作活動を展開する李





『生を祝う』

李 琴峰  
朝日新聞出版 2021年 ¥1,760  
ISBN : 9784022518033

「あなたは、この世界に生まれてきたのですか？ この世界に生まれてきてくれますか？」。子どもを産むためには、その子からの同意が必要となる世界を舞台にした衝撃作。『彼岸花が咲く島』（文藝春秋、2021年）で芥川賞を受賞した李琴峰による、芥川賞受賞後第1作。



『星月夜』

李 琴峰  
集英社 2020年 ¥1,650  
ISBN : 9784087717198

両親の反対を押し切り、日本の大学で日本語を教える台湾人の柳凝月（リウコウゲツ）は、新疆ウイグル自治区出身で、日本の大学院を目指す生徒の玉麗吐孜（タマリトシ）に初めて会ったときから魅了されていた。生国の政治情勢、家族のこと、隠している自分のセクシュアリティ。共通の言語を持ち、語り合い、玉麗吐孜のことをわかっていてと思っていた柳だが、玉麗吐孜が背負う重りを知らずにいた自分に気づく——。李琴峰が描く、静かな祈りの物語。



『空港時光』

温 又柔  
河出書房新社 2018年 ¥1,650  
ISBN : 9784309026954

羽田や台北——空港を舞台に鮮やかに浮かびあがる10の人生、そして新しい生のかたち。表題作「空港時光」と傑作エッセイ「音の彼方へ」のほか、「出発」「日本人のようなもの」「あの子は特別」「異境の台湾人」「親孝行」「可能性」「息子」「鳳梨酥」「百点満点」「到着」を収録。2017年に『真ん中の子どもたち』（集英社）で芥川賞候補になった、いまもっとも注目される気鋭作家の飛翔作。



『歩道橋の魔術師』

呉 明益／天野健太郎・訳  
河出文庫 2021年 ¥1,078  
ISBN : 9784309467429

懐かしい記憶には魔法がかかっている。1980年前後の台北・中華商場を舞台に、少年少女が繰り広げる不思議な物語。踊り出す黒い小人、女子トイレの99階のエレベーターボタン、死にゆく小鳥に起きた出来事、若者たちの恋……。ジャンプブーツを履いた魔術師が生み出すさまざまな奇跡。現代台湾を代表する作家・呉明益の連作短篇。単行本未収録短編を収録。



『ポラリスが降り注ぐ夜』

李 琴峰  
筑摩書房 2020年 ¥1,760  
ISBN : 9784480804921

レズビアン、トランスジェンダー、アロマンティック・アセクシュアル、バイセクシュアル、パンセクシュアル……。多様な性的アイデンティティを持つ女たちが、冴え冴えと輝く星に手を伸ばすように、魂の、身体の、触れあいを求めて集う2丁目のバー「ポラリス」。国も歴史も超えて思い合う気持ちがあるが、7つの恋の物語。台湾人で初めて芥川賞を受賞した著者の代表作にして芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞作。



『五つ数えれば三日月が』

李 琴峰  
文藝春秋 2019年 ¥1,540  
ISBN : 9784163910871

日本で働く台湾人の私。台湾人と結婚し、台湾に移り住んだ友人の実娘。平成最後の夏、ふたりは5年ぶりに東京で再会する。話ず言葉、住む国——選り取ってきたその先に、いまだから伝えない思いがある。第161回芥川賞候補作。



『眠りの航路』

呉 明益／倉本知明・訳  
白水社 2021年 ¥2,640  
ISBN : 9784560090695

台北で暮らす「ぼく」は数十年に一度と言われる竹の開花を見るため陽明山に登るが、その日から睡眠リズムに異常をきたす。「ぼく」の意識は、やがて太平洋戦争末期に神奈川県の高座海軍工廠に少年工として渡り、日本軍の戦闘機製造に従事した父・三郎の人生を追憶していく。呉明益の長篇デビュー作であり、のちの『自転車泥棒』（文春文庫、2021年）や『歩道橋の魔術師』（河出文庫、2021年）にもつながる原初の物語。



『複眼人』

呉 明益／小栗山 智・訳  
KADOKAWA 2021年 ¥2,420  
ISBN : 9784041063262

次男が生きられぬ神話の鳥から追放された少年。自殺寸前の大学教授の女性と、山に消えた夫と息子。母を、あるいは妻を失った先住民の女と男。事故で山の“心”に触れた技術者と、環境保護を訴える海洋生態学者。傷を負い愛を求め人間たちの運命が、巨大な「ゴミの鳥」を前に重なり合い、驚嘆と感動の結末へと向かう。台湾民俗的神話×ディストピア×自然科学×ファンタジー。ときに美しく、ときに残酷な、いくつもの生と死が交差する感動長編。



『独り舞』

李 琴峰  
光文社文庫 2022年 ¥704  
ISBN : 9784334793845

私は私。海を渡っても、異なる言語を操っても、何も変わらない。自分自身であること、それが生の苦難の根源なのだ——。心惹かれていた同級生との死別により、幼くして死への想いに取り憑かれ、一方で、性的マイノリティとして、内なる疎外感に苛まれていた迎梅、女子高での密やかな恋、そして運命を暗転させる「災難」の果てに、日本に半ば逃亡のような気持ちで渡った彼女の葛藤と孤独を描く、李琴峰の鮮烈なデビュー作。



『あの頃、君を追いかけた』

九把刀／阿井幸作、泉 京鹿・訳  
講談社文庫 2018年 ¥715  
ISBN : 9784065130612

「あなたって本当に幼稚」。優等生だし可愛いし、だけどクールな君が、ある日、後ろの席にやってきた。勉強嫌いの俺に、容赦ない指導を繰り返す君。放課後の教室、帰り道、いつのまにか俺の毎日は、その笑顔でいっぱいになっていた。誰もが、切なくて愛しい「あの頃」を思い出す。青春ラブストーリーの翻訳版。2011年に映画化され台湾で社会現象を巻き起こすほど空前のヒットを記録。2018年、物語の舞台を日本に移し映画化された。



『雨の島』

呉 明益／及川 茜・訳  
河出書房新社 2021年 ¥2,640  
ISBN : 9784309208398

元神話学教授のチーズ職人の家に養子として迎えられた、難病のミミス研究者の物語「闇夜、黒い大地と黒い山」。鳥の声を聞き取る自閉症の鳥類行動学者が、母の死をきっかけに聴力を失い、新たな言語を構築していく「人はいかにして言語を学ぶか」……。近未来を舞台に、ウィルスプログラム「裂け目」から送られる親しい人々の記憶と、台湾の自然、動植物をモチーフとして描かれる美しい6つもの短篇集。著者自作のカラー博物画6点を収録。



『リングサイド』

林 育徳／三浦裕子・訳  
小学館 2021年 ¥1,980  
ISBN : 9784093865883

台湾東部の花蓮がモデルとされる地方都市を舞台に、プロレスと出逢い、魅せられた人々の人生ドラマ10話からなる連作短篇集。本作品でデビューした著者の林育徳は、台湾を代表する作家・呉明益に師事する新世代作家であり、言うまでもなく熱烈なプロレスファン。故・三沢光晴氏の試合を楽しみにする「ばあちゃん」を描いた「ばあちゃんのエメラルド」のほか、台湾のインディーズプロレス団体を題材にした短編などを収録。





増補版  
『香港・濁水溪』

邱永漢  
中公文庫 2021年 ¥1,100  
ISBN: 9784122070585

金だけだ。金だけがあてになる唯一のものだ——。戦後まもない香港で、故郷を捨てた台湾人たちがたくましく生き抜く姿を描き、外国人初の直木賞受賞作となった「香港」。日本統治と国民党の圧政のもと、ある台湾人青年が味わった挫折と虚無を主題とする「濁水溪」。著者の青春時代が結晶した代表作に、作家デビュー当時を回顧した随筆「私の見た日本の文壇」を増補した新版。



『台北  
プライベートアイ』

紀蔚然/松山むつみ・訳  
文藝春秋 2021年 ¥1,980  
ISBN: 9784163913674

劇作家で大学教授でもある眞誠は、若い頃からパニック障害と鬱に悩まされてきた。ある日、日頃の鬱憤が爆発して酒席で出席者全員を罵倒してしまう。恥じ入った眞誠は芝居も教職もなげうって台北の裏路地・臥龍街に隠棲。私立探偵の看板を掲げることに。探偵VS犯人のスリリングなストーリー展開、ハードボイルド小説から受け継いだシニカルなモノローグ、台湾らしい丁寧な会話。台湾を代表する劇作家が放つ、探偵小説の新たな傑作。



『冥王星より  
遠いところ』

黄崇凱/明田川聡士・訳  
書肆伝説屋 2021年 ¥2,090  
ISBN: 9784863854840

病院で母を介護する青年と、妻や娘と暮らす小説家志望の高校教師。青年の夢に出てくる男の姿は高校教師である「俺」の日常とまったく同じで、高校教師が小説で描き出す青年は現実の「俺」と少しも変わらない。ふたりの「俺」は現実の日常や夢の中、小説の中で、母の病室と実家を行き来し、ネルゲの少女とデートする——。この現実と夢なのか、虚構なのか。台湾における尊厳死問題を示唆した長編デビュー作。



『おはしま』  
連鎖する怪談

三津田信三、薛西斯、夜透紫、瀟湘神、陳浩基/玉田誠・訳  
光文社 2021年 ¥2,530  
ISBN: 9784334914264

三津田信三書き下ろしの怪異譚「おはしま」を起点に、香港・台湾の気鋭のホラー作家が物語を連鎖させた異色の恐怖リレー小説。夢の中でひとりずつ死んでゆく小学生。珊瑚の響に宿る霊神。都市伝説に殺された動画配信者。社絶な過去を告白する娼婦。決して離れない異形の怪物。いびつに結ばれた5つの物語が、奇怪なかたちに膨れあがる。



黄春明選集  
『溺死した老猫』

黄春明/西田勝・編訳  
法政大学出版局 2021年 ¥2,860  
ISBN: 9784588490392

「光復」後も困難な政治状況が続いた台湾社会で、近代化ゆえに弱い立場におかれた民衆の現実を温かいまなざしで見つめながら、老若男女の悲哀と喜び、苦難と希望をユーモアあふれる筆致で描き続けてきた黄春明。1960年代以降の現代台湾文学を牽引し、世界各国語に訳され愛されてきた作家の代表的な短編小説10篇と、訳者によるインタビューなどを収録する格好のセレクション。



『三つの名を持つ  
少女』  
その孤独と愛の記憶

三毛/間ふさ子、妹尾加代・訳  
石風社 2022年 ¥1,980  
ISBN: 9784883443093

台湾の作家・三毛の稀有な人生を、彼女自身が綴った文章で再構成した自伝的物語。三毛は台湾と中国で1千万部を超えるベストセラーとなり、中国語圏の若者数億人を熱狂させ、日本では2019年に出版された『サハラの間月』(石風社、2019年)の著者。本書はその姉妹編にあたり、魂を揺さぶる孤独な少女の心の旅路が描かれている。



『台湾聖母』

村上政彦  
コールサック社 2020年 ¥1,870  
ISBN: 9784864354127

檳榔スタンドの若い秀麗の堪能な日本語の響きに、74歳で台湾の歳時記を志す俳人・劉秋日は恋をする。秀麗は妊娠をしていて、母や兄に秋日の子だと告げる。日本で出産したいという秀麗を秋日も追いかけて行くが——。台湾を旅するあなたに贈りたい。俳句をとした日本と台湾の知られざる歴史や人間ドラマ。



客家文学的珠玉1  
『ゲート激情の書』

鍾肇政/永井江理子・訳  
未知谷 2018年 ¥1,760  
ISBN: 9784896425611

著者が敬愛する、ドイツの詩人・ゲーテ。彼の愛情史と成長を、老年から少年期まで時間をさかのぼる手法で語った小説。ゲーテ晩年における心身一体の愛の崇高を際立たせ、その意義を明白にする。親密で激烈に純真な永遠の女性像を描く、読む者の胸を熱くするラブストーリー。



『ここにいる』

王聡威/倉本知明・訳  
白水社 2018年 ¥3,080  
ISBN: 97845600932705

「大阪市母子競死事件」を台湾の異才が小説化。母子の孤独死は無縁社会を象徴する事件として台湾でも大きく報じられ、衝撃を受けた著者は舞台を台湾に置き換え本書を書き上げた。他者からどう見られるかをつねに意識し、自分が選ばれるべき人間だと自負する主人公。SNSが浸透し、容易に他人と深くかかわれる社会の中で、なぜ母子は孤独死するにいたったのか。事件の全貌を独自体によって鮮烈に描き出し、現代が含む闇を射抜く傑作長篇。



『冬將軍が来た夏』

甘耀明/白水紀子・訳  
白水社 2018年 ¥2,640  
ISBN: 9784560096352

レイプ事件で深く傷ついた私のもとに、突然現れた終活中の祖母と5人の老女。台中を舞台に繰り広げられる、ひと夏の愛と再生の物語。女性問題、独居老人、同性愛など、現代の台湾社会が抱える問題をとらえつつ、著者のまなざしは、社会的弱者の心を温めて「生」をいどる「記憶」に注がれる。大河巨篇『鬼殺し』(白水社、2016年)で好評を博した、台湾の若手実力派作家、甘耀明の長編小説。



客家文学的珠玉2  
ランツァイシア  
『藍彩霞の春』

李喬/明田川聡士・訳  
未知谷 2018年 ¥3,080  
ISBN: 9784896425628

最後にたのみうるのは自分自身でしかない。台湾の客家人作家であり評論家でもある李喬が、自身の「反抗の哲学」を物語化した大作の全訳。1980年代の台湾の春巻婦現象を、少女春巻を通して鮮やかに描き出す。



台湾文学ブックカフェ1  
女性作家集  
『蝶のしるし』

呉佩珍、白水紀子、山口守・編  
白水紀子・訳  
作品社 2021年 ¥2,640  
ISBN: 9784861828775

複数形の、台湾文学。恋愛結婚と出産を経て、幸せな家庭を手にしたはずの主人公が、「よき娘」「よき妻」を演じてきた人形のような過去に別れを告げ、同性への愛に生きる決心をする——。その後の台湾レズビアン文学に大きな影響を与えた表題作「蝶のしるし」のほか、女性作家の小説全8篇を収録。





台湾文学ブックカフェ2  
中篇小说集  
『バナナの木殺し』

呉佩珍、白水紀子、山口守・編  
池上貞子・訳  
作品社 2022年 ¥2,640  
ISBN : 9784861828782

原色の、台湾文学。「ほんとうの悲劇にはいつも滑稽な要素があるよね」。大学生の主人公は、乗っていた車に自分からぶつかり飛ばされた謎の少女・品琴に興味をひかれ、調べていくうちに、バナナ畑の中で暮らす彼女の家族とある宗教団体の関係を突き止める——。新世代作家の期待の星による、家族の秘密をめぐる怪奇的で幻想的な表題作のほか、中篇全3篇を収録する小説集。



台湾文学ブックカフェ3  
短篇小说集  
『プールサイド』

呉佩珍、白水紀子、山口守・編  
三須祐介・訳  
作品社 2022年 ¥2,640  
ISBN : 9784861828799

来るべき、台湾文学。豊かな田園風景、碧い海と空、大きな太陽、賑やかな屋台——。台湾の生活シーンを多様に描いた、近年の佳作全11作を収録。多元的なアイデンティティがからみ合う、現代台湾が立ち現れる小説集。



『台湾生まれ  
日本語育ち』

温又柔  
白水Uブックス 2015年 ¥1,540  
ISBN : 9784560721339

3歳のときに東京に移住した台湾人作家が、台湾語・中国語・日本語の3つの母語の狭間で揺れ、惑いながら、ときには国境を越えて自身のルーツを探った感動の軌跡。日本エッセイスト・クラブ賞受賞作に、刊行後の出来事について綴った3篇を加えた、待望の増補版。両親が話す中国語は難をもって覚えさせられたものであり、祖父母が話す日本語も同様に覚えさせられたものだと知った著者がたどりついた境地とは。



『台湾海峡  
一九四九』

龍應台/天野健太郎・訳  
白水社 2012年 ¥3,300  
ISBN : 9784560082164

1949年、国共内戦に敗れた国民党政府軍と戦乱を逃れた民間人とが大学して台湾へ押し寄せた。その数ざっと200万。この「外省人」という新たな勢力の大波に、50年にわたる日本の統治期を経て飲み込まれた台湾人。互いに痛みを抱えるこの小さな島に暮らしてきた外省人と台湾人の「原点」を、いま、見つめ直す。「世界でもっとも親的な国」と言われる裏にどんな事情があるのか。台湾のベストセラー作家が放つ歴史ノンフィクション大作。



『永遠の時の流れに』  
母・美君への手紙

龍應台/劉燕子、和泉ひとみ・訳  
集古舎 2019年 ¥2,400  
ISBN : 9784904213865

台湾のベストセラー女性作家・龍應台による、認知症の母・美君に向けて綴られた手紙は、ときに哀憫を滲ませながらも、その語り口の通底音は軽やかで明るい。母に読まれることも母からの返信もないであろう「十九章の手紙」に「掌編のコラム」と「息子たちとの対話」を併録。歴史ドキュメンタリー『台湾海峡一九四九』（白水社、2012年）、逝く父に寄り添う母を描いた『父を見送る』（白水社、2019年）に続く3部作の完結編。



『さらばあやしい探検隊  
台湾ニワトリ島乱入』

椎名誠  
角川文庫 2019年 ¥792  
ISBN : 9784041083055

「ビールだマグロだ宴会だ!」。過去最大の怪しいメンバーが台湾東南の田舎町に集結。ニワトリに包囲された一軒家で目的のない大集団合宿を敢行する。謎のうんとと格闘し、離島でマグロを狙い、小学生に真剣野球勝負を挑み、即席楽団が町を練り歩く。ひらひらやふにやへらを相手にシーナ隊長はどう立ち向かうのか。抱腹絶倒暴飲無駄酔の満腹御礼の完全カキオロン3部作ファイナル。



『フォルモサ』  
台湾と日本の地理歴史

ジョージ・サルマナザール/  
原田範行・訳  
平凡社 2021年 ¥1,980  
ISBN : 9784582769135

18世紀初頭、フォルモサ（台湾）人を自称する詐欺師による、架空の台湾・日本紹介。すべて架空の創作ながら知識層に広く読まれ、当時のヨーロッパで大ベストセラーに。その後の東アジア認識や、あの「ガリヴァー旅行記」にも影響を与えた世紀の奇書。



客家文学的珠玉3  
『曾貴海詩選』

曾貴海/横路啓子・訳  
未知谷 2018年 ¥2,200  
ISBN : 9784896425635

1982年に葉石濤、鄭炯明、陳坤崙らと文学雑誌『文学界』を創刊、1991年には『台湾文学』を創刊した曾貴海。医師であり、詩人であり、環境保護を訴える社会運動家でもある著者の現代詩と客家詩の中から、代表的な作品を十余の詩集から厳選編纂。



客家文学的珠玉4  
『利玉芳詩選』

利玉芳/池上貞子・訳  
未知谷 2018年 ¥2,200  
ISBN : 9784896425642

1952年、屏東県内埔郷に生まれ、詩、エッセイ、児童文学など多岐にわたって活躍する利玉芳。1986年に呉濁流文学賞、1993年に陳秀喜詩人賞、2016年に榮獲台湾詩人賞、2017年には客家傑出成就賞（言語・歴史・文学部門）を受賞した現代を代表する女性客家詩人の現代詩と客家詩から、代表的作品113篇を収録。



『おなじ月をみて』

ジミー・リャオ/天野健太郎・訳  
ブロンズ新社 2018年 ¥1,540  
ISBN : 9784893096517

少年ハンハンは、窓の外を見てずっと誰かを待っている。そこへ、ケガをしたライオン、ゾウ、ツルがやってきて——。少年が待ちわびているのは誰？ 戦争と平和、悲しみと喜び、すべては同じ空の下で起きていることを心に刻む絵本。台湾の国民的絵本作家が贈る、いま伝えたいメッセージ。



『カタカタカタ』  
おばあちゃんのたからもの

リン・シャオペイ/宝迫典子・訳  
ほろぶ出版 2018年 ¥1,760  
ISBN : 9784593505975

カタカタカタはすごいんだ。わたしのスカート、リュック、かわいいもの——。みんなみんな、おばあちゃんがカタカタカタでつくってくれて！ 女の子とおばあちゃんのやりとりがあったかい、なつかしくてキュートな台湾発の絵本。



『やさいだいすきだワニ』

タンム・ニュー/中川ひろたか・訳  
おむすび舎 2020年 ¥1,540  
ISBN : 9784890995164

2003年に台湾で出版されて以来、22刷のロングセラーを記録している絵本。ある日、おひやくしょうさんは1匹の赤ちゃんワニを見つけました。赤ちゃんワニはおひやくしょうさんが働く間、いつもいっしょ。畑の野菜をいっぱい食べて、ワニくんは元気いっぱい大きくなりました。そんなある日、お医者さんが健康診断に来て——。野菜好きのワニくんがつくる優しい世界。



## 日本の台湾文学研究

明田川 聡士

近年、台湾文学に関する研究書の刊行が続いている。日本文学や英米文学に比べると、台湾文学の研究は依然マイナーな専門分野であるが、最新の研究書ではどのような視点から何を論じているのか。それを見ている前に、これまで日本で台湾文学研究がどのように展開してきたのか、まずは簡単に振り返ってみたい。

### 台湾文学研究の展開

戦前の日本は本土の内地と植民地などの外地に分けることができたが、その頃内地における台湾文学研究は皆無だった。もちろん楊逵（1906～85）や龍瑛宗（1911～99）のように東京の主要文学誌で高く評価された作家はいたが、そうした評価は作家個人や掲載作品に限ったものであり、台湾における文学状況を把握したうえで考察ではない。他方、台湾で近代文学が形成されていくのは1920年代半ば以降のこと。終戦までの間には、台湾人や在台日本人が「台湾文学」という用語を頻繁に使い、台湾文学に関する文学史的な展開をたどる論評なども出た。だが、そうした植民地台湾での文学研究が、戦後の日本へと時をおかずに引き継がれていくことはなかった。

というのも、戦後日本で台湾に対する関心は、当初は学術的なものではなかったからだ。研究者の視線は過去の侵略戦争へ

の批判的反省と新中国建設への大きな期待から中国大陆へと向かい、台湾に対する関心は軽視あるいはタブー視された。その傾向は文学研究においても同様だった。そのため戦後直後に日本の学界で台湾文学研究はほとんど出てこなかったのだ。やがて1960年代になると旧植民地文学研究の風が吹くが、それは台湾を含む旧植民地下の人々がどのように戦争に組み込まれ苦悩したかを考察するものだった。代表的論者には、大学所属の研究者ではないが台湾滞居経験もある文芸評論家の尾崎秀樹（1928～99）がいる。こうして戦後日本では台湾文学を複眼的に語る論者がようやく出てきたのだ。

一方1960～70年代にかけては、台湾出身で大学などで研究職に就いていた王育徳（1924～85）や戴國輝（1931～2001）が、台湾史に関する著作を発表した時期でもあった。彼らの歴史研究も台湾文学研究の展開には無視できない影響をもたらした。東京では戴を中心に台湾現代史研究会が結成されたが、歴史と文学の関係は深く、会のメンバーによる著作や論文では戦前や戦後の台湾文学研究に関する論考が発表されていった。また、関西でも天理大学で台湾文学研究会が設立された。この頃には中国の国連代表権交替や日米企業による台湾での経済侵略、台湾人元日本兵への補償問題などの関心から、研究者からも台湾に対する学術的な視線が注がれていった。

やがて1980～90年代にいたると、戦後台湾文学作品も国内出版各社よりシリーズの翻訳書として刊行される企画が出たことで、中国文学研究者の学術的関心も台湾文学に寄せられていった。東京大学では東京台湾文学研究会が組織され、研究者から大学生まで台湾文学研究に関心を注いでいった。そして1998年には学際的な学術ネットワークとしての日本台湾学会も設立され、全国の各機関で台湾文学研究を行っていた研究者が集う場も出現した。このようにして、日本における台湾文学研究は本格的に「学問」として認知されていったのである。

### 近年の台湾文学研究書

こうした日本で台湾文学研究を長年リードし、自身の研究の集大成としてまとめたのが、下村作次郎『台湾文学の発掘と

探究』（田畑書店、2019年）である。著者は天理大学名誉教授。本書は過去30年間の研究成果をまとめた論文集だ。台湾新文学の父と称される賴和（1894～1943）の創作を中心に、中国近現代文学の文豪・魯迅の著作との関連性を論じていくが、賴和の創作以来台湾文学に一貫している魯迅コンプレックスを指摘していく点は読みごたえがある。また、戦前内地での台湾人留学生たちの動向についても多く論じている。帝都東京では台湾人留学生を中心に台湾芸術研究会が組織されたが、その機関誌「フォルモサ」(Formosa=台湾の美称)をめぐる研究からは、台湾と東京をつなぐ当時の動向をひしひしと感じることができる。

下村の研究が日本統治期から終戦前後までの台湾文学に視点を当てているのに対して、拙著『戦後台湾の文学と歴史・社会——客家人作家・李喬の挑戦と二十一世紀台湾文学』（関西学院大学出版会、2022年）は戦後から現在にいたるまでの台湾文学界の諸現象に関心の矛先が向いている。戦後の台湾では世界最長とも言われる戒厳令が敷かれたが、本書ではその抑圧された社会で台湾近現代史を創作の題材に取り込んだ客家人作家・李喬（1934～）の代表作を中心に、戒厳時期から民主化へと向かう台湾の歴史と社会の移り変わりを参照しながら文学作品を読み解いていく。戒厳時期は閉鎖的な印象を受けがちだが、戦前生まれの日本語を理解する作家が社会に広がる制約をかいくぐりながら日本語をとおして海外文学に触れ、国民党独裁に対する抵抗の精神を育んできた点を指摘する。ほかに、呉明益（1971～）をはじめ21世紀台湾文学に関する論考もあり、今世紀の台湾人が抱える価値観や社会の様子を知るのにも役立つだろう。

日本語に堪能であった本省人作家としては、鄭清文（1932～2017）も有名だ。松崎寛子『鄭清文とその時代——郷土を愛したある台湾作家の生涯と台湾アイデンティティの変容』（東方書店、2020年）は鄭の伝記的研究。作家の生い立ちをたどりながらアイデンティティの所在を明らかにする。台湾人アイデンティティが社会で確立していく2000年代以降には、鄭の小説は高校国語教科書にも採用されたが、台湾文学が教育現場

でどのように教えられ、青少年が何を読み込んできたかを探る論旨は興味深い。

このように近年の台湾文学研究書では戦前から今世紀にいたるまでの諸作品について論述するが、中でも女性文学が果たした役割について考察するのが、豊田周子『台湾女性文学の黎明——描かれる対象から語る主体へ 1945-1949』（関西学院大学出版会、2021年）だ。台湾文学界で女性作家の活躍はめざましいが、戦後直後の一時期にはブランクが生じていた。本書はその点に着目し、戦前からの主要作家である張我軍（1902～55）、呉濁流（1900～76）、楊逵、王昶雄（1915～2000）ら男性作家の作品で表れる女性表象を手がかりに女性文学の空白期をたどる。

また、ほかには張文菁『通俗小説からみる文学史——1950年代台湾の反共と恋愛』（法政大学出版局、2022年）、謝惠貞『横光利一と台湾——東アジアにおける新感覚派の誕生』（ひつじ書房、2021年）もある。前者は台湾文学史の壁に埋もれてきた通俗小説に着目した著作。大衆が好んで読んできたにもかかわらず、これまでの台湾文学研究ではあまり注目されてこなかった通俗小説の役割を再評価している。後者は大正から昭和にかけての名作家である横光利一の創作を、巫永福（1913～2008）や劉吶鷗（1900～40）、翁鬧（1910～40）ら日本統治期の台湾人作家・文化人がどのように受け入れていったのかを考察する。

以上のように、ここで紹介した台湾文学研究書はいずれも文学研究のジャンルに当てはまるが、その考察の中で言及されていく点は、文学作品の枠を超えて、歴史、社会、政治、経済、教育、思想などさまざまな領域に及ぶ。各書籍の巻末には豊富な参考文献一覧がついているので、巻末記載の文献リストから興味を覚えた一般書を探すのにも便利だ。研究書を入口とする、普段とは少し違った読書をゆっくり楽しむのもよいかもかもしれない。文学研究書ではあるが、台湾社会を知り、理解するには最適な書籍のひとつであることは間違いなく、みなさんには一読をぜひおすすめしたい。



### 『台湾文学の発掘と探究』

**下村作次郎**  
田畑書店 2019年 ¥6,600 ISBN: 9784803803631  
台湾人作家の声が聞こえる——、さまざまな言語と格闘し、時代に翻弄され、体制に利用され、そして禁圧されながらも生き抜いてきた。台湾文学の根拠と発展をたどる、著者自身の台湾文学研究書。



### 『鄭清文とその時代』郷土を愛したある台湾作家の生涯と台湾アイデンティティの変容

**松崎寛子**  
東方書店 2020年 ¥5,500 ISBN: 9784497220110  
日本統治時代に生まれ、終戦、旧国民党独裁時代、民主化と進む激動の戦後台湾を生きた作家・鄭清文。彼が登場人物にスティグマ（一般と異なることから差別を受けがちな属性）を持たせた理由や彼の生い立ちなどを通じて、作品に込められた心や寓意を読み解く。



### 『戦後台湾の文学と歴史・社会』客家人作家・李喬の挑戦と二十一世紀台湾文学

**明田川聡士**  
関西学院大学出版会 2022年 ¥5,280 ISBN: 9784862833273  
戦後の台湾文学は、戒厳時代の自由なき時代に生きた台湾人の声をひるい上げ代弁するものだった。彼らは具体的にどのような形で創作し、何を表現しようとしたのか。背景に見られる社会状況や歴史的展開に注視しつつ、台湾人の根拠を知り、その声に耳を傾ける。



### 『台湾女性文学の黎明』描かれる対象から語る主体へ 1945-1949

**豊田周子**  
関西学院大学出版会 2021年 ¥5,280 ISBN: 9784862833259  
日本統治期に萌生した台湾新文学において、もっぱら描かれる対象であった台湾の女性たちは、戦前戦後にかけて台湾の体制が大きく転換する中で、いかに自らを自覚的に語るようになっていったのか。



### 『通俗小説からみる文学史』1950年代台湾の反共と恋愛

**張文菁**  
法政大学出版局 2022年 ¥5,390 ISBN: 9784588498205  
日本の植民地統治が終わると、台湾は圖書市場を新たに構築せざるをえなくなった。国民党政権から反共文芸を推奨される中、巷で読まれたものは何であったか。作家や作品に加え、政策、市場、メディア、読者の多角的な視点を加えた全7章。



### 『横光利一と台湾』東アジアにおける新感覚派の誕生

**謝惠貞**  
ひつじ書房 2021年 ¥6,820 ISBN: 9784823411090  
日本統治期台湾の文学において、横光利一の「純粋小説」や作品が与えた影響は大きく、その影響は東アジアに広がる。本書は、台湾人作家がいかに横光を受容したかを解明し、台湾文学史の中で看過されてきた「台湾新感覚派」の誕生を位置づける。



### 明田川 聡士 あけたがわ・さとし

獨協大学国際教養学部専任講師

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士（文学）。横浜国立大学国際教育センター非常勤講師などを経て現職。専門分野は台湾文学・台湾映画。三度の飯と同じくらい本が好き。書店と図書館めぐりはもっと大好き。台湾旅行中も書店、図書館（そのあとは温泉、夜市、食事のあとは書店のハンゴ……）は毎日のルーティーン。身近な場所に個性的な書店が多いのは本当にうらやましい!!

#### 主な著書

・『戦後台湾の文学と歴史・社会——客家人作家・李喬の挑戦と二十一世紀台湾文学』関西学院大学出版会、2022年  
・『台湾文学と台湾ニューシネマ』ユリイカ 特集：台湾映画の現在」青土社、2021年



## 映画の中に 台湾のアイデンティティを見る

— 案内人 —  
稲見公仁子

台湾に興味を持つきっかけは人それぞれだが、中でもエンターテインメントがきっかけだったという人は比較的多いのではないだろうか。映画や音楽、ドラマなどまちがいはなく楽しい。ただ楽しいだけではなく、発見も少なくない。

台湾映画について、それが台湾人により撮られ台湾で使われる言語で上映されるものという定義で話せば、その歴史は日本による統治が終わり、中華民国の統治が始まった1940年代後半からなのでリュミエール兄弟のシネマトグラフから半世紀以上遡って始まったことになる。その頃の映画製作は、日本で映画を学んだ者や上海の映画人、伝統芸能・歌仔戲の役者たちにより支えられていた。言語的には、政策として国語（北京語）が推進され、映画も国語が推奨されたが、多数派の本省人は国語が理解できず、台湾語の映画も許容されていた。いや、許容とはいうが、むしろ'60年代までは台湾語映画のほうが数量的には多かった。ただし低予算のモノクロ映画で、外国映画を模したのも珍しくなかった。一方で、国語映画は予算もかけられ、'60年代の健康写真映画の代表作で李行監督の『海辺の女たち』（1964年）や『あひるを飼う家』（1965年）はカラーで撮影されている。健康写真は、写真とは名ばかりで現実を映してはならず、大陸反攻が厳しくなり閉塞感が漂う社会に対し、こうあってほしいと明るい世界を描いた。『台湾ローカル文化と中華文化』（好文出版、2018年）で吉川龍生が書いているように、外省人たちが美しい台湾を新たな故郷として受け止めアイデンティティの再構築につながることを狙いとしていたのだろう。

台湾語映画も健康写真映画もいずれも戒厳令下の映画だ。本当の意味でリアルな台湾の姿が映画に映し出されるのは、やはり台湾ニューシネマ以降だ。'80年代は社会運動が活発になっていった時代。台北市武昌街のカフェ・アストリアは、文学者や画家、映画人らが集う文化サロンとなっていた。侯孝賢や呉念真、陳坤厚とも通い、語り合った。まだ若かった彼らは情熱にあふれていた。それは文学者であ

り脚本家でもある朱天文の著作『侯孝賢と私の台湾ニューシネマ』（竹書房、2021年）から読み取れる。ニューシネマの映画人は、仲間が映画を撮ると言えばプロデューサーとして、また俳優として助け合う。侯孝賢と陳坤厚はともに会社をつくり、監督とプロデューサーという役割を交互に務めていた時期があったし、エドワード・ヤンは侯孝賢を主演に『台北ストーリー』を撮った。やがて侯孝賢の『悲情城市』（1989年）がベネチア国際映画祭金獅子賞を、エドワード・ヤンの『牯嶺街少年殺人事件』（1991年）が東京国際映画祭インターナショナル・コンペティション（当時）で審査員特別賞などを受賞し、台湾映画は世界に注目されるようになった。戒厳令が解除され民主化が進んだことで、題材にも変化が現れていた。白色テロなど歴史の暗部も描かれるようになったことは大きい。言語的にも、本来の写実性という意味で国語と台湾語、必要とあれば日本語などが使われるようになっていく（この時期、台湾語映画は廃れている）。

その後も、李安が『ウェディング・バンケット』（1993年）でベルリン国際映画祭金熊賞、蔡明亮が『愛情萬歳』（1994年）でベネチア国際映画祭金獅子賞と国際映画祭で評価される監督が続いた。が、そのことで国際的な評価を意識しすぎて台湾の観客を忘れたかのような映画が続出してしまった。娯楽映画を継続して撮っていたのは、先頃台北電影節（映画祭）で卓越貢献賞を受賞した朱延平くらいだろう。ヒット作が出なければ資本は集まらず、創作活動は思うようにできなくなる。'90年代後半から2006年あたりまで、台湾映画界は冬の時代に入ってしまった。

さて、映画は大きく劇映画とドキュメンタリーに分けられる。台湾で劇映画が冬の時代にあった間、ドキュメンタリーは異なる展開を見せていた。施政者による政治的意図を持ったニュースフィルムを別にすれば、台湾ドキュメンタリーの歴史は1980年代の緑色小組による社会運動の記



稲見公仁子 いなみ・くにこ  
台湾映画研究家

武蔵大学人文学部社会学科（現・社会学部）で文化人類学を学び、雑誌社勤務を経てフリーランスに。大学時代の指導教授が東アジア文化圏の研究者で、教授の研究室で台湾菓子と紹興酒、台湾語歌謡を聴かせていただいたのが台湾原体験。その後、社会を理解するツールとしての映画のおもしろさを強く感じるように。昨今のものはもとより1950～60年代の台湾語映画（台語片）にも興味津々で、粗製乱造と言われてもそのパラエティ豊かなラインナップとつくり手のバイタリティには敬服する。時代に合せて変化し続ける台湾の伝統芸能・布袋戲にも興味があり、できることなら台語片時代の布袋戲映画『西遊記』『大飛龍』を観たいと切望！ フィルム、残っていますか？

### 主な著書

- 『アジア映画の森——新世紀の映画地図』（共著）作品社、2012年
- 『中華電影データブック 完全保存版』（監修）キネマ旬報社、2010年

録あたりを始点としていほど歴史は浅い。'90年代には呉乙峰ら全景がワークショップを開き、ドキュメンタリー制作の裾野は広がっていく。呉乙峰は1999年の台湾大震災の後日談を綴った『生命 希望の贈り物』（2003年）が日本でも劇場公開されているが、この映画は台湾公開時、劇映画も含めその年の台湾映画でナンバー1の興行成績を収めた。その後も顔蘭權・莊益増が共同監督を務めた『無米楽』や林育賢監督の『ジャンプ！ ポーイズ』（ともに2005年）、楊力州監督『青春ララ隊』（2011年）、華天灝監督『不老騎士 歐兜邁環台日記』（2012年、日本未公開）など劇映画と興行成績で肩を並べるドキュメンタリー映画が登場している。中でも全編空撮で環境問題を訴えた齊柏林監督の『天空からの招待状』（2013年）は社会現象化し国政にも影響を及ぼした。

ドキュメンタリー映画の何が台湾の人々を惹きつけるのか、楊力州に尋ねたことがある。「台湾人は自分たちの物語が見たいのだ」と楊は答えた。彼は当代きっての人気ドキュメンタリー作家で、近いところでは『台湾、街かどの人形劇』（2018年）が日本で劇場公開されているが、昨今はただ撮るだけではない。台湾の抱えるさまざまな社会問題を扱った18本の短編ドキュメンタリーシリーズでプロデューサーも務めている。

2014年3月、海峽兩岸サービス貿易協定批准をめぐる学生たちが日本の国会議事堂にあたる立法院を占拠するひまわり学生運動が起きた。そのドキュメンタリー映画『太陽、不遠』はその年のうちに完成した。日本では翌2015年の山形国際ドキュメンタリー映画祭で『太陽花占拠』の邦題で上映されている。早い時期からこの運動のドキュメンタリーができるという話は流れていて、その用意周到なことに敬服していたのだが、山形での上映に際し、壇上にずらりと並んだ映像制作者たちの若さに台湾ドキュメンタリーの裾野の広がりの一端を見た気がした。このドキュメンタリーに参加した映像制作者のひとり、のちに長編ドキュ

メンタリー『私たちの青春、台湾』（2017年）の金馬獎授賞式で世間を騒がすことになる傳檢だ。彼女がひまわり学生運動の中心人物を撮影していたことの経緯などはその著作『わたしの青春、台湾』（五月書房新社、2020年）にあるが、やはりアイデンティティの問題が絡んでいるようだ。

自分たちの物語であるドキュメンタリーと、自分たちの伏せられていた歴史をも題材にしたニューシネマは“自分たちの”という点、台湾のアイデンティティの問題が共通する。“自分たちの”は、思えば虫の息だった台湾劇映画のその復興のキーワードでもあったようだ。

2008年の魏徳聖監督の『海角七号 君想う、国境の南』は寄せ集めバンドによる町興しの話で、題材となった音楽の力もあるが、さまざまな出自の登場人物たちが軽快に物語を紡いでいた。この映画の登場をもって台湾映画は新しい時代に入り、台湾映画を観よう意識して観客が映画館に足を運ぶようになった。多くの映画に台湾らしさが見られ、言語はもとより夜市や伝統芸能、歴史的な要素が織り込まれた映画が増えていった。硬派なものでは魏監督の『セデック・バレ』2部作（2011年）や楊雅喆監督の『GF\*BF』（2012年）、娯楽性の高いものでは陳玉勳監督の『祝宴！ シェフ』（2013年）、馬志翔監督の『KANO 1931 海の向こうの甲子園』（2014年）などが挙げられる。比重に違いはあるものの、いずれもエンターテインメントでありながら台湾のアイデンティティを提示することを忘れていない。

長々と書いてきたが、私たちは台湾映画を知ることで台湾の人たちのアイデンティティの一端を垣間見ることができる。そうしてお互いを知り、互いの文化や歴史を尊重し合うことができれば素晴らしいと思う。



## 『台湾ローカル文化と中華文化』

氷上 正、山下一夫、千田大介、吉川龍生

好文出版 2018年 ¥1,100  
ISBN : 9784872202175



台湾において中国大陸から移り住んできた漢民族が多数派を占め、また文化的にもその影響を受けてきたことは周知の事実だろう。本書は3人の研究者が、それぞれ別の視点で台湾に持ち込まれた文化、主にエンターテインメントのルーツとその変容について考察したものだ。

まず第1章で取り上げているのは、ここ数年、日台合作作品のテレビ放映やネット配信、また、国宝級の人形師を追ったドキュメンタリー映画の劇場公開などで日本でも注目された布袋戯(パペット)だ。人形劇のカテゴリーには布袋戯と傀儡戯(操り人形)、そして皮影戯(影絵劇)の3つがあり、第2章では皮影戯にスポットが当てられている。人形劇とはいえ、布袋戯も傀儡戯も皮影戯も本来宗教と結びついていて廟で上演されるものであり、子ども向けではなかった。やがて布袋戯は時代に合わせて変容し、ライブを信条とする伝統芸能と、メディアとも結びついたサブカルチャーのふたつの様相を見せるようになっていく。

皮影戯は、ヨーロッパの影絵劇にも影響を及ぼし、そのヨーロッパの影絵劇の影響を受けたのが日本の藤城清治だと聞

けば、その華麗さが少しはイメージできるだろうか。台湾皮影戯の人形には中国大陸各地の人形とは異なる特徴があり、また、中国大陸の皮影戯の人形も地域により異なる特徴を持つという。写真を示しながらの丁寧な分析は興味深い。

第3章は映画がテーマで、李行監督の健康写真映画『海辺の女たち』(1964年)、『あひるを飼う家』(1965年)と1930年代の孫瑜監督の上海映画を対比させて語っている。双方とも抑圧を越えて最終的にカタルシスをえる物語ととらえることができ、中国では抹殺されていたが、'60年代の台湾に一部が遷移したという考察だ。健康写真は、その政治的意図に目が向けられがちだが、ここでは郷里を離れなければならない外省人の心情に寄り添っている点が特徴的だ。

多民族で構成される台湾で、これらはその文化の一部でしかないが、一つひとつが奥深い。これらを生で体験したいと思わずにいられない。

本書は、2018年の金馬奨授賞式で最優秀ドキュメンタリー映画賞に輝いた『私たちの青春、台湾』の舞台裏の記録である。つまりドキュメンタリー映画のドキュメンタリーなわけだが、つくり手の心の交差がじつに興味深く描かれている。

監督の傅榆は、マレーシア華僑の父とインドネシア華僑の母の下に生まれ、支持政党国民党という家庭で育った。そんな彼女は、大学に進んでから周囲の学生に民進黨支持者が多いことに驚く。やがて、台湾には政治をテーマにしたドキュメンタリーが少ないと指摘する恩師の影響を受け、異なる政治的立場の者同士との対話をドキュメンタリー制作の中で試みることになる。そして、学生運動のスターだった陳為廷と中国出身の留學生プログラマー・蔡博芸と出会い、ふたりを取材。ふたりをそれぞれに扱った短編ドキュメンタリーは評価され、最終目的であった長編にまとめようとするのだが、そこで想定外の結末を迎えてしまう。ドキュメンタリーは劇映画と違い、最初に最後までシナリオを書ききってしまうことは困難だ。取材を重ね、編集を進める中で

でき上がっている部分がある。それが現実。傅榆は、ドキュメンタリーの作業をする中でぶち当たった壁、己の弱さをも綴る。困難を乗り越え完成した映画は金馬奨で最優秀ドキュメンタリー賞という栄誉に輝いた。その受賞式に彼女はどんな思いで登壇したのか、素直な気持ちを彼女は語る。

原書にもこの日本語版にも映像作品にもタイトルには「青春」の文言が入っている(原書は『我的青春、在台湾』、映画原題は『我們的青春、在台湾』)。この文言には若さゆえの情熱と揺らぎが感じられる。その青春は取材対象者の青春であり、つくり手である傅榆自身の青春でもある。台湾の人々は、しばしばドキュメンタリー映画の中に自分たちの物語を見だし支持する。フィルムメーカーとしての傅榆のこの話はほんの一例ではないが、血の通ったひとりの台湾人の存在が確かに感じられる。

## 『わたしの青春、台湾』

傅榆・陳令洋・編/関根謙、吉川龍生・訳

五月書房新社 2020年 ¥1,980  
ISBN : 9784909542304



## 『侯孝賢と私の台湾ニューシネマ』

朱天文/樋口裕子、小坂史子・編訳

竹書房 2021年 ¥2,750  
ISBN : 9784801926103



1989年のベネチア国際映画祭での『悲情城市』の金獅子賞(グランプリ)受賞は、世界に台湾ニューシネマを強く意識させる出来事だった。台湾ニューシネマの萌芽は、1980年代初頭にさかのぼる。この本は、ニューシネマに脚本家としてかかわってきた朱天文がさまざまな機会に、さまざまな場に寄稿してきた文章を中心にまとめた日本独自企画の1冊である。

10代半ばで作家としてデビューした朱天文は、1982年、26歳のときに侯孝賢と出会う。当時の侯孝賢は陳坤厚とコンビを組んでいて、侯孝賢と陳坤厚は朱天文の小説の映画化権を欲していた。そんな出会いから始まり、侯孝賢が主演しエドワード・ヤンが監督を務めた『台北ストーリー』の撮影秘話や中央電影で台湾ニューシネマの発展に寄与した明驥のことなど、第1章では貴重なエピソードの数々が語られる。第2章では秘蔵写真を中心に2003年から'06年にかけて雑誌『印刷文學生活誌』に連作されたものから13編が、また、第3章ではフランス『カイエ・デュ・シネマ』誌によるインタビューや侯孝賢との対談などが収められている。

原文が書かれたのは、本書のための書き下ろし部分を除くと、1982年から2006年までと幅があるが、とくに第1章は映画づくりの真っ只中で書かれたものが多く、そのときならではの空気感、ニューシネマに懸ける若き映画人たちの熱い思いが伝わってくる。著者秘蔵の写真の数々もその思いを裏づける。1980年代台湾ニューシネマは輝かしい時代であるが、少々意外なことに只中にいた人々が楽観していた訳ではなかったことも語られる。伝説となってしまった(であろう)時代を生きてきたと蘇らせる、そんな1冊だ。

余談になるが、表紙の若き日の著者と侯孝賢のツーショットは、エドワード・ヤンが撮影したもの。のちに袂を分かつ二人巨匠のコラボレーションも、'80年代ニューシネマの象徴と言える。

リュミエール兄弟により映画が誕生したとされる1895年、奇しくもこの年より台湾は50年にわたる日本の統治を受けることになった。そのせいか台湾映画の最初をどこに置こうという問題では、しばしば植民地時代の50年をすっ飛ばし、1980年代ニューシネマかせいぜい'60年代の健康写真映画あたりから語られることが多い。

ユリイカのこの特集号は、植民地時代の台湾での映画の受容から始まり、1950~60年代の台湾語映画のムーブメントや1980年代ニューシネマはもとより2000年代に入ってから今日にいたるまでをカバーしていることが特長だ。じつは筆者も寄稿しているのだが、執筆陣の顔ぶれとテーマの多彩さに興奮せずとも2000年代に入ってから今日にいたるまでをカバーしていることが特長だ。じつは筆者も寄稿しているのだが、執筆陣の顔ぶれとテーマの多彩さに興奮せずとも2000年代に入ってから今日にいたるまでをカバーしていることが特長だ。じつは筆者も寄稿しているのだが、執筆陣の顔ぶれとテーマの多彩さに興奮せずとも2000年代に入ってから今日にいたるまでをカバーしていることが特長だ。

のジャンル映画も忘れず、台湾アニメーションの歴史にも話題は広がる。新型コロナウイルス感染症のパンデミック下で発行された1冊ということでは、その影響に言及した部分があることにも触れておきたい。コロナの現状を単純に苦境と受け止めるのではなく、前向きにとらえる映画人たちがいるという。未来はさまざまな要因で決まり、ゆえに断言できないが、期待はしたくなる。

さまざまな論考が並ぶ中、そこに生気を与えるかのように監督たちへのインタビューが挟み込まれる。個人的には、陳玉勳が1990年代に処女作を制作する際、ニューシネマの路線か否かで悩み、その後長い年月映画から離れる話に惹きつけられた。それは彼だけのことでなく、'90年代から2000年代初頭の台湾映画界を如実に示すエピソードと思えるからだ。そのほか、'80年代に日本で台湾映画を紹介した田村志津枝女史のインタビューも意外性に満ちていて読みごたえがある。

## 『ユリイカ [詩と批評]』 特集:台湾映画の現在 2021年8月号(第53巻第9号)

青土社 2021年 ¥1,760  
ISBN : 9784791704040







『交差する日台戦後サブカルチャー史』

押野武志、吉田司雄、陳國偉、漆銘宏・編著

北海道大学出版会 2022年 ¥3,300  
ISBN : 9784832934146

戦後、旧植民地時代の「日本」の記憶が完全に忘却、あるいは否定されたわけではなく、台湾社会に「日本」イメージは読み替えられながら残存し現在にいたる。文学、映画、オタク文化、ミステリなど、台湾において戦後日本のサブカルチャーがどのように受容され土着化していったのか、また、台湾から日本のサブカルチャーは何を逆輸入しようとしたのか。戦後から現代にいたるサブカルチャー史を、日本と台湾双方の観点から明らかにする。



認識・TAIWAN・電影  
『映画で知る台湾』

野嶋剛

明石書店 2015年 ¥1,760  
ISBN : 9784750341194

急速に活気を取り戻す台湾映画。本書は元朝日新聞台北支局長が映画という窓をとおして台湾をのぞき込んだ「台湾論」である。「日台」や「外省人」「格差」など、いまの台湾社会を映し出す映画を紹介しながら、台湾社会のトレンドや現実を、監督や俳優のインタビューを交えながら描き出す。



『アジア都市音楽ディスクガイド』

韓国・台湾・ベトナム・タイ・インドネシア・香港・マレーシア・シンガポール・フィリピン・中国・ラオスの良曲600選

菅原慎一、パンス・監修

DU BOOKS 2022年 ¥2,420  
ISBN : 9784866471457

シティポップ、K-POP、AOR、ギターポップ、R&Bなどなど。1970年代の名作から、配信のみの新世代まで、アジア音楽のディガーたちが台湾を含め、各国の良曲を厳選。City Pop、Light Mellow、Future Funk、Boogieのファンにもおすすめする600曲。



『台湾ジャーナリストが見たニッポンのジャズ喫茶』

周靖庭/高智範・訳

CDジャーナル 2021年 ¥2,200  
ISBN : 9784809774163

日本固有の文化＝ジャズ喫茶。いま韓国・台湾などアジア諸国をはじめ、ロンドン・ロサンゼルスなど欧米でも「ジャズ喫茶＝JAZZ KISSA」が登場して話題となっている。本書は台湾のオーディオ専門誌のジャーナリストが見た日本全国20店のジャズ喫茶の姿を、その魅力とともに紹介した「音楽文化論」とも言える内容で、2020年に台湾で発売された『爵士喫茶案内所』を翻訳したもので、日本版を出すにあたり、新たに2軒の台湾の音楽スポットを紹介。



オンデマンド出版

『「帝国」と「祖国」のはざま』  
植民地期台湾映画人の交渉と越境

三澤真美恵

岩波書店 2019年 ¥9,240  
ISBN : 9784007309434

台湾の映画は日本統治時代から民主化以後の台湾語映画の復権にいたるまで、外来政権と台湾人意識との間で葛藤を演じてきた。「帝国」日本と「祖国」中国のはざま映画に自己表現の場を求めて「交渉」と「越境」を繰り返したふたりの映画人の行動をとらえて、植民地期の台湾映画の歴史をトレースし、中華映画圏の失われた環をつなぐ。



『人類学者、台湾映画を観る』  
魏徳聖三部作『海角七号』・『セデック・バレ』・『KANO』の考察

沼崎一郎

風響社 2019年 ¥880  
ISBN : 9784894894037

戦後日本人男性、人類学者という立場への自覚と反省からさまざまな角度で台湾を研究する著者。台湾の映画監督・魏徳聖の『海角七号』『セデック・バレ』『KANO』が描く植民地台湾と帝国日本。映画に込められた歴史や民族のアイが自身にはどのように見えるかを明らかにする。



『歌唱台湾』  
重層的植民地統治下における台湾語流行歌の変遷

陳培豊

三元社 2021年 ¥3,850  
ISBN : 9784983035328

本書は台湾語流行歌から台湾を描き出そうとするものである。台湾語流行歌の日本化、演歌化は戦後、国民党政府支配になってから。台湾人が日本の要素を自らの歌唱文化に取り込んだのは、いかなる要因に由来するのか。台湾社会が工業化へ向かう中、何が起こったのか。農村人口が大量に移動しはじめる戦後の社会的な変遷の中で、台湾語流行歌はいかなる需要を基盤に、どのようにして日本演歌とともに自分が歌う「伝統」をつくり出したのか。



『戦前外地の高校野球』  
台湾・朝鮮・満洲に花開いた球児たちの夢

川西玲子

彩流社 2014年 ¥3,080  
ISBN : 9784779120206

1931年、甲子園大会の決勝は台湾代表の嘉義農林と愛知県の中京商業。試合終了後、監督の近藤兵太郎は新聞記者の取材にこう答えた。「嘉農は日本人、台湾人、高砂族の三者混成チーム。私は三者一体の嘉農精神を教えているのです」。台湾を軸に、満洲・朝鮮も含めた戦前・戦中の中等・高等学校野球史を貴重な資料をもとにとどる。



『台湾人生』  
かつて日本人だった人々を訪ねて

酒井充子

光文社知恵の森文庫 2018年 ¥814  
ISBN : 9784334787363

1895年から50年にわたり、台湾は日本の統治下にあった。この時代を生きた世代は「日本語世代」と呼ばれる。「私たちは日本人以上の日本人」「私たち日本に捨てられた。でもやっぱり、日本人好きなの」「ご苦労さんの一言がほしいの」――台湾に魅せられた映画監督が、歴史に翻弄された人々への取材を重ね、その悲しみと愛憎を丁寧に記録する。



『台湾エンタメパラダイス』vol.20  
特集 「海を駆ける」  
ディーン・フジオカ

キネマ旬報ムック

キネマ旬報社 2018年 ¥1,650  
ISBN : 9784873768533

スター、ドラマ、映画、音楽、観光まで楽しい台湾最新情報が満載なエンタメ情報誌。台湾ドラマの注目作、BLドラマ、華流歴史ドラマ、『軍中楽園』ほかの映画情報、監督たちの声も大充実。この1冊で台湾エンタメが丸ごとわかる。台湾旅行計画にぴったりの花蓮、台中、台北の楽しい観光情報も掲載。



『台湾プロ野球』  
〈CPBL〉観戦ガイド&  
選手名鑑2021』

ストライク・ゾーン

論創社 2021年 ¥1,980  
ISBN : 9784846020545

台湾プロ野球のすべてがわかるガイドブック。全5球団のカラー写真名鑑（寸評付）、2020年シーズンの回顧と2021年の展望、全球場ガイドとチーム紹介。北海道日本ハムファイターズに所属する王柏融（ワン・ボーロン）選手のインタビューと野球観戦で使える台湾華語などを収録。



## 台湾漫画の スタックート

李 衣雲



李 衣雲  
リ・イユン

台湾 国立政治大学台湾史研究所准教授  
専門分野はマンガ研究、台湾社会文化史、大衆文化論。大好きな漫画は萩原望都の『ポーの一族』（小学館、1998年）と『トーマの心臓』（小学館、1995年）で、中学生の頃、「光華商場」という台北のアンダーグラウンドな漫画市場で薄い海賊版漫画本を買って読みました。『トーマの心臓』の主人公ユリスモールが女性名に翻訳され、男子寮になぜ女子がいるのかと、当時ずっと悩んでいました（笑）。

主な著書

- ・『台湾における「日本」イメージの変化、1945-2003——「給日現象」の展開について』三元社、2017年
- ・『変形、象徴與符号化的系譜——漫画的文化研究』福郷出版社、2012年
- ・『辺縁的自由人——個歴史学者的状況』共著、游擊文化、2019年

近代的な漫画表現技法は18世紀に登場し、19世紀には物語を連続的に描く漫画の手法が徐々に発展していくことになった。台湾では、20世紀初頭に、すでに近代漫画が登場していたにもかかわらず、植民地母国である日本と同じように近代漫画をつくり続けることができず、政治的な抑圧や創作の断層を幾度も経験することになった。その中でもっとも大きな転換点となったのは、1966年3月から厳格に施行されることになった「漫画検閲制度」である。

1945年の終戦からしばらくの間、台湾人は「祖国の夢」を抱いていた。「血縁民族」と思い込んだ中国（中華民国）が台湾に平等をもたらし、それによって台湾人は「二等国民」の地位から解放されると信じていた。この時期、台湾の資本屋台では上海からもたらされた「連環図画」と呼ばれる技法の漫画が人気を博していた。連環図画に描かれた物語は民族的英雄譚や演義もの、そして映画にいたるまで幅広く、1ページに1枚の絵が描かれ、絵の横や下に数行の文章が記載してあるというものだった。また1950年代には、台湾の一部の出版社が日本のいわゆる「赤本」漫画を台湾で翻刻し、資本屋台で流通させるようになった。

1960年代に入ると、資本屋が漫画の主な流通先となった。1950年代後半に人気があった『東方少年』の休刊後、編集者の廖文木や蔡焜霖は資本漫画に目を向け、最初は原稿不足から日本の漫画から原稿をえて、そこから次第に若い新人も採用していくようになった。当時の台湾では武侠小说が流行しており、蔡焜霖はこれらを脚色、有能な若手漫画家にひとり1週1作品の形で描かせ、次々に出版した。これにより多くの読者が生まれ、志成、太子、宏甲といった出版社が次々に設立された。ピーク時には台湾に2,000～3,000軒の資本屋があり、文昌出版社だけでも月に20～30タイトルを発行し、発行した各2,000部すべてが売り切れたという。この時代が台湾漫画の黄金時代と言える。

国民党政府は、こうした資本屋と漫画の発展に目をつけた。1962年11月、教育部（文科省に相当）は「青年児童の心身保護」を名目に、「連環図画編集・印刷指導指針」（原文：編印連環図画輔導弁法）改訂版を公布した。同指針は、漫画は事前に政府の審査を受け、審査に合格し免許を取得したあとでなければ出版できないと規定した。しかし、こ

の審査費用は、教科書代を基準とすればその定価の40倍、すなわち1冊120台湾ドルだった。なお、当時の大学教授の月給は約1,600台湾ドルだった。出版社が幾度も陳情し、その読者が大人の労働者であると主張しても、国民党と政府の方針は変わらなかった。この指針が1966年3月に施行されると、出版社は審査費用高騰に直面、彼らはもともと資本力の小さい零細経営だったことから資金難に陥り、資本漫画業界は大打撃を被った。1967年時点で審査へ送られたのは合計2,844冊だったが、1972年には1,390冊に、1974年から1976年にかけては、毎年平均400冊程度まで減少した。

当時の台湾資本漫画業界には数多くの有名な漫画家があったが、より多くの無名の漫画家が必然的に存在、業界を支えていた。しかし、漫画検閲制度の施行により、彼ら台湾の資本漫画家の大半は発表場所を喪失、この業界から離れざるをえなくなった。

1975年、コピー機という新技術が徐々に低価格化し、台湾印刷業界へも徐々に浸透しはじめた。出版社は、日本の漫画を直接翻刻し、日本人の名前を消し、量、神社、お城などを塗りつぶして日本の手がかりを消し、台湾人作家による作品として検閲へ送った。こうした手法により、出版社は台湾の漫画家に原稿を依頼するよりはるかに安いコストで漫画を出版することができるようになった。このため、1976年以降、日本の漫画が台湾市場を席巻することになった。

しかし、1972年、日本と台湾の国交が断絶すると、日本は国民党政府内部の求心力を高めるために「敵」になった。そうした中で、国民党系の漫画家は、台湾における日本漫画人気に不満を覚えるようになった。そこで、1982年には、漫画家・牛哥によって日本漫画に対する「漫画清浄運動」が発動され、最終的には1986年から1987年7月15日の戒厳令解除（解嚴）、そして同年12月の漫画検閲制度廃止までの時期、台湾においてはほとんど日本漫画が見られな

くなった。

この日本漫画不在の空白期間、1985年に、政府との関係良好な新聞社『中国時報』から漫画雑誌『『歓楽』』が出版され、敖幼祥、鄭聞、麥仁杰などが中国時報系でデビューした。しかし、この雑誌は主に一般書店での流通が中心で、貸本屋で漫画雑誌を読み慣れた読者とはあまり接点が生じなかった。実際、これに先行する1980年には、貸本屋出版社の尹士曼出版社が5度にわたって「小咪漫画新人賞」を開催している。この「小咪」からは、2022年に金漫賞生涯功労賞を受賞した任正華や台湾初の少女漫画家・張静美、そして游素蘭、高永、周顯宗といった著名な作家が出ている。台湾の芸術・文芸界は、しばしば時報の『歓楽』の意義を強調し、低俗であると考えられていた貸本屋や貸本漫画を無視していた。

1987年末、検閲制度が廃止されると、日本の翻訳漫画が泉のように湧き出し、『歓楽』は1988年5月に休刊となった。1989年、時報社は再び『星期漫画』を創刊した。この1989年は、台湾漫画雑誌が多様化した年である。台湾漫画市場の動向に目をつけた非漫画専門出版社も市場に参入を果たした。一例として、華尚出版の『周末』や駿馬出版の『漢堡』などがある。しかし、いずれも2年たらずで休刊している。

1992年、漫画専門出版社の東立と大然が、純国産漫画雑誌として、『龍少年』、『星少女』、『公主』、『神氣少年』の発行を開始した。東立の社長である范萬楠は、自身も1960年代に人気漫画作家として活躍した人物であり、彼はつねづね「台湾人が自分の生活から描き出した物語の方が、きっと日本の漫画より人々の心に響く」と考えていた。そこで彼は「日本漫画による儲けで、台湾漫画を育てる」という戦略を採り、新人を育てていった。この時期の台湾の漫画家は、すでに1975年以降の日本の戦後新漫画を読んで成長した新世代だった。彼らの技法は、三段式コマ分けを中心とする1960年代式の近代漫画技法とはまったく



### 『用九商店』(全5巻)

ルアン・グアンミン／沢井メグ・訳

トゥーヴァージンズ 2022年 各¥990  
ISBN: 9784910352145 (1巻)  
9784910352152 (2巻)  
9784910352206 (3巻)  
9784910352367 (4巻)  
9784910352411 (5巻)

台湾でもっとも権威ある漫画賞「金漫賞」受賞作。かつては「人々につながりを与える場所」であり、「心のより所」でもあったよろず屋。都市化が進み、台湾でもなくなりつつある商店を中心に、日常を懸命に生きる人々の交流、ひとりの青年の学びと成長を描く。



### 『DAY OFF』

毎日青葉／沢井メグ・訳

トゥーヴァージンズ 2022年 ¥990  
ISBN: 9784910352190

企画部の花小飛と29歳で部長を務める石冬雲は相思相愛のカップル。初めてのお泊まり、取り引き先の美人へのヤキモチ、自分だけが見られる寝顔。たくさん笑ってときにケンカして、絆が深まっていく。台湾発、やり手男前硬派上司×健気ワンコ部下ボーイズラブ。



### 『綺譚花物語』

星期一回收日／楊 双子・原作  
黒木夏兒・訳

サウザンブックス 2022年 ¥1,760  
ISBN: 9784909125378

高等学校、日本への進学、職業婦人といった「新しい未来」が少女たちの前に輝かしく提示され、それでもその未来への扉を開くか否かの選択は決して少女たちの自由意思にはゆだねられていなかった時代。昭和11年、台中市を舞台にした台湾発の百合マンガ。



### 『記憶の怪物』(全3巻)

MAE

竹書房 2020年 ¥726 (1巻)、¥748 (2巻)、¥759 (3巻)  
ISBN: 9784801969582 (1巻)  
9784801969599 (2巻)  
9784801971202 (3巻)

©MAE/竹書房

3カ月前に兄・千晴を事故で亡くした千澄。兄の死に苦しむ日々を送っていたところ「記憶」を糧に故人へ擬態する人工知能擬態生物「ハビネス」の存在を知り、もう一度千晴に会えるならと実験モニターに申し込む。台湾で話題沸騰、究極の兄弟愛を描いた作品。



異なっていた。1960年代に超人気作家であった葉宏甲は、漫画検閲制度に抑圧され筆を折り、検閲制度の廃止後に再出発を望んだ。しかし、当時の読者から見れば、葉の漫画は、自分たちの知る漫画とはまったく異なるものだった。そのため葉が漫画作家として再登板することはかなわなかった。

1990年代は台湾漫画の勃興期であると言えるだろう。とりわけ、1992年から1996年にかけては、日本漫画に押されつつ、インターネットが未発達であったこともあり、紙の漫画がおお支持され、検閲制度以降の新世代台湾人漫画作家が続々とこの業界でデビューを果たした。ただ、文化には蓄積が必要である。長きにわたって、中国本位主義的教育とメディア環境のもとで成長した世代は、台湾で生活しながらも、「想像上の中国」をもとに考えをめぐらせていた。それゆえ彼らは、セーラー服を着た日本の学校、架空の中国を舞台にした時代劇といった、フィクショナルな物語をつくることが多い。もちろん、台湾の漫画が、台湾の物語しか描いてはいけないうわけではない。しかし、1950年代から1990年代までの漫画を見ると、そのほとんどが台湾の生活とは関係ないことがわかる。戒厳令が解除されたあとも、1990年代に台湾を舞台とした長編作品は、邱若龍『霧社事件』(時報)、林政徳『YOUNG GUNS』(大然)、黃佳莉『守護靈・Touch』(東立)などあまり多くはない。

したがって、台湾を舞台にした漫画の登場は、ある意味で象徴的な意味を持つ。2002年、中央研究院デジタル文化センターは「台湾コレクション」プロジェクトを立ち上げ、その成果の一部は漫画という形で、2009年から発行されている季刊漫画誌『CCC創作集』にて発表されている。掲載された作品には、ファンタジー、ドキュメンタリーなどが含まれる。これらの作家は同人誌出身が多く、画力も乏しいが、それぞれの作品には豊富な資料と関連する解説が添えられていることが多く、物語の内容と資料、発生した時空とが結びつき、「台湾化」の象徴的意義により深みを持たせている。これら作品の一部はのちに単行本化され

ている。たとえば1935年の台北を舞台にしたAKRUのファンタジー『北城百畫帖』(蓋亞)はそのひとつである。

総じて、2010年代までの台湾漫画は異なるふたつのルートをとった。そのひとつは、時報系、「CCC」、蓋亞出版社のような、一般書店を拠点とし、より文化的な内容を持つもの。もうひとつは、低俗なものとされ、日本の漫画を流通させた貸本屋であり、台湾の漫画読者にとっても見慣れた道だった。2009年以降の台湾的な要素を含んだ漫画は、おおむね前者を通じて出版されたものが多い。たとえば、都会の若者が故郷の田舎で雑貨店を開く『用九商店』(トゥーヴァージンズ、2022年)、都市を舞台にした軽いボーイズラブ『DAY OFF』(トゥーヴァージンズ、2022年)、日本統治時代の女性同士の悲恋を描いた『綺譚花物語』(サウザンブックス、2022年)、台湾の美食を紹介し、読者を空腹へと誘う『台湾ごはん何食べる?』(幻冬舎、2020年)などだ。しかし、台湾で販売部数1万冊を超えるベストセラーとなったボーイズラブ漫画『記憶の怪物』(竹書房、2020年)は、後者である。その売れ行きから関連商品やゲーム化までされた台湾では珍しい作品となっている。このふたつの系統の漫画は、一体どこが異なっているのか。実際に手に取って比較してはいかだろうか。

最後に、『台湾の少年』(岩波書店、2022年)に触れておく。きめ細やかな印刷が美しいこの作品は、『東方少年』編集者であり、貸本漫画の潮流を生んだ文昌出版社創業者のひとり、漫画検閲制度に対抗するため総合誌『王子』を創刊した蔡焜霖氏の波乱に富んだ人生を描いたものである。この作品を読むことは、日本時代と国民党時代にまたがる台湾人迫害の歴史と台湾漫画検閲制度時代の漫画史を読むことでもある。この作品を通じ、蔡氏時代の台湾人の「声」に少しでも触れることを強くおすすめする。



『台湾の少年』(全4巻)

游珮芸、周見信/倉本知明・訳  
岩波書店 2022年 各¥2,640  
ISBN : 9784000615457 (1巻)  
9784000615464 (2巻)

白色テロの深い傷を描く台湾の歴史コミック。1930年、日本統治時代の台湾に生まれた蔡焜霖は、教育者になることを夢見て育った。戦争は日本の敗戦で終わったが、戦後は国民党政権による新たな支配が始まり、ある日憲兵が訪ねてきて――。



『緑の歌—収集群風一』  
(上下巻)

高妍  
KADOKAWA 2022年 ¥858 (上巻)、  
¥880 (下巻)  
ISBN : 9784047370777 (上巻)  
9784047370784 (下巻)

“好き”の気持ちに、国境はない。村上春樹、岩井俊二、はっぴいえんど、ゆらゆら帝国——。台湾・台北で暮らす少女・緑は、日本の文化を通じて新しい世界と出逢う。見たことのない景色、初めての感情。音楽を愛し、物語に救われたひとりの少女の物語。上下巻。





## 歴史を結ぶ近代建築、 歴史を融合させる「文創」

— 案内人 —  
上水流久彦

台湾の街を歩いていると、なにかしらわくわくしてくる。ビル一面を覆う大きさのカラフルな看板、衣服や靴などが売られている屋台、その横にスターバックスなどのカフェやコンビニエンスストア。ビルが並ぶ大通りからひとつ中に入ると、南国を思わせる樹木と一体化した店、建物の軒下にテーブルと椅子を並べ食事をしている台湾の人々。「の」という平仮名を店名に用いたショップがあったりもする。

他方、日本を思い起こさせる木造建築や、赤レンガでつくられた建造物など、古い建築物を利用した雰囲気のあるカフェやレストラン、本屋、雑貨屋などに出会うこともある。店主のこだわりが伝わってくる本のラインナップ、オリジナルなデザインの文具、有機野菜など原材料にこだわった料理など、心惹かれるものも多い。ときには、その建物の由来が書かれたプレートやパンフレットがあり、「昭和」や「大正」の文字から日本統治期からの建築物（以下、日式建築）だと知ることがある。

台湾の都市や地方では、1970～80年代に建てられたビルの老朽化が進み、その建て直し、地域の再開発が進められている。その中で、日式建築は取り壊しと保存・利活用の焦点のひとつとなっている。戦後、老朽化などのため多くは取り壊されたが、総統府（日本統治期は、総督府）をはじめ、現存するものも少なくない。一部は歴史遺産に認定され、一部はリノベーションされ、雰囲気のあるカフェなどに生まれかわっている。台湾の文化省文化資産局（<https://nchdb.boch.gov.tw>）によれば、台湾には「古蹟（生活上必要なものとして建てられた歴史、文化、芸術的価値を持つ建築物およびその附属施設）」や「歴史建築（歴史的事件とのかかわりが重視される）」などの歴史遺産が約2,400あり、そのうち統治期に建築されたものが1,300強で過半数を占める。

植民地統治という負の遺産と一見思われる日式建築が、

なぜ保存され、利活用されているのだろうか。台湾が親日国家で、日本の物を大事にしてくれているというわけではない。むしろ、日本統治期の建物という歴史が忘れられて、単純にモダンでレトロな雰囲気があると利用されていることもある。木造建築物の場合は、日本に行かなくとも日本の雰囲気が楽しめることと宣伝され、客を集めていることもある。保存・利活用される理由はさまざま。だが、見落とすにはいけないことは、自分たちの歴史を語る道具としての側面である。

先住民（現在、台湾の人口の約2%を占める）のいた台湾に、明や清の時代に中国大陸から多くの漢人が移り住むことで、現在の台湾社会の原型がつくられた。だが、台湾の人に言わせると、自分たちで自分たちを長らく統治することはなかったという。オランダの支配に加え、清朝、日本に統治され、第2次世界大戦後は、中国共産党との戦いに敗れた中国国民党の独裁政治のもとにあったと語る。日本統治期には日本語を学ばされ、日本人になれと言われ、国民党統治期には中国語を習わされ、台湾ではなく中国の歴史や地理を教えられ、中国人になれと言われた。

だが、1990年代に民主化が一挙に進み、総統（大統領）も直接選挙で選ばれるようになり、ようやく自分たちで自分たちを統治するようになった。そのような変化のもと、台湾の人たちは中国ではなく、台湾の歴史や文化、風土を自分たちの国の歴史や文化、風土として学び、誇りを持つようになる。このような動きを台湾の本土化と言う。本土化のもと、2000年以降、「台湾は中国の一部」というよりも、「台湾は台湾だ」という意識や、「台湾は中国とは違う」という考えが、台湾社会に浸透していった。ここ10年はそのような流れがとくに顕著だ。

日式建築の保存や利活用も台湾の本土化や台湾意識の高揚と無縁ではない。中国大陸にはない台湾独自の経験として日本の統治がとらえられ、台湾の歴史の「見証（目に見



上水流久彦 かみづる・ひさひこ  
県立広島大学地域基盤研究機構教授

県立広島女子大学国際文化学部助手などを経て現職。専門は文化人類学。ここ10年以上は日本統治期の建築物について調査。そのほか、台湾と沖縄の歴史的関係や少子化の中の祖先祭祀にも関心を持っている。台湾で好きなスポットは、日本統治期の建物が文化施設になった台北市萬華にある紅樓と台湾のさまざまな神様が祀られている龍山寺。赤レンガづくりの紅樓は周囲にはバーもあり、その開放性も含めて毎回行きたくなる。台湾でも歴史がある龍山寺の周囲には、菓草ジュースの店やかばん屋、食事をする屋台が並んでおり、近くに夜市（ナイトマーケット）も。これこそ台湾と思っている。2年間暮らしした萬華のこのような庶民的な雰囲気大好きである。

### 主な著書

- ・『帝国日本における経緯・断絶・殊途——人の移動』共編、風響社、2020年
- ・『東アジアで学ぶ文化人類学』共編、昭和堂、2017年

える証、生き証人）」にこれらの建物がなっているからだ。さらに言えば、台湾の歴史の一部というだけではなく、自分たちが生まれ育ってきた、自分たちが住む地域を語るモノとして（たとえば、その地区の昔の繁栄を偲ばせる）、または自分たちの家族や一族の歴史を語るモノとして、保存・利活用されている。

もちろん、このような日式建築の利活用は、その多様な姿のひとつに過ぎない。都市開発のうねりの中で壊すほうがよいと考える人も多くいる。日本統治期の建築物ゆえに日式建築を負の歴史としてとらえ、そこになんらかの価値を見いだすことに反対する人も存在する。「そんなもの、保存するな。われわれには中華の歴史を感じさせる古い建物やお寺がいっぱいある」という訳だ。日式建築には台湾のさまざまな複雑なまなざしが向けられている。

日式建築の利活用をけん引するひとつが、「文化創意産業」である。2000年代半ばから展開してきた。台湾では略されて「文創」と言われる。この言葉に込める意味は個人によってさまざまだが、ここでは一旦、台湾文化の要素（デザイン、習慣、建築物など）を創造的におしゃれで、モダンでアートなものに変え、それらを活用して行なうビジネスとしておきたい（「一旦」定義する理由は、『TAIWAN FACE GUIDE FOR 台湾文創』の紹介文に書いた）。そして、日式建築の多くがレトロでモダンな雰囲気を楽しむ文化創意産業の拠点になっており、台湾各地に存在する。台北市の西南にある紅樓、台南市にある林百貨、台湾東部の花蓮市にある酒工場跡地を活用した花蓮文化創意産業園區などが有名である。このような建物の利活用のみならず、台湾の伝統的な意匠や生活用品をもとにオリジナルなデザインや小物などのグッズ、さらには料理のメニューや生活スタイルが、文創の一環として生み出されている。

文創も当然のこと、台湾の本土化や台湾意識の浸透と深く結びついている。台湾を中国の一部ではなく、台湾とし

て学び、台湾文化への愛着を深め、台湾に自らのアイデンティティを感じるによって、台湾の文化や生活習慣に根差した文創の展開が可能となるからである。文創の土台には、台湾の社会や文化に自信を持つ台湾の人々の思いがある。

そのような台湾への愛着は、「ああ、台湾だ」という思いにさせてくれる日常の何気ない台湾の暮らしや風景、建物への再評価につながっている。冒頭で述べたような樹木に寄り添うように存在する店や、ときには日本語も混じったカラフルな看板、人々の暮らしが感じとれる屋台の様子などなどである。

さらに戦後、国民党とともに渡ってきた人々が集住した古い住宅街（眷村と言われる）の一部も、文創のもとリノベーションされ、モダンな観光地となっている。彼らは、外省人と称され、本省人と言われる台湾に戦前から住む人々やその子孫との対立が戦後長らく指摘されてきた。だが、文創による眷村の利活用は、そのような対立をアートの方で乗り越え、眷村をも台湾文化に融合していく力になっている。

このように、文創を知らずしていまの台湾を読み解くことはできないのだ。

## 『台湾レトロ建築案内』

辛 永勝、楊 朝景 / 西谷 格・訳

エクスナレッジ 2018年 ¥1,760  
ISBN: 9784767824345



2013年から台湾各地に残るレトロ建築を訪ね歩き、レトロ建築のファンクラブ「老屋顔」を設立したふたりによる、写真とエッセイからなる1冊。老屋顔とは「まえがき」によれば、レトロ建築が持つ顔という彼らの造語である。カフェやレストランとして日本人観光客にも人気の台北にある「青田七六」、台湾でもっとも早くエレベーターが備えつけられた台南の「林百貨」、日本統治期の高級料亭であった「紀州庵」など、24軒の建物が取り上げられている。古蹟などにも指定されるこのような建物も多く掲載される一方で、戦後建築され、台湾の人々の暮らしが感じ取れるような建物（たとえば「玉山旅社」）も紹介されている。この「玉山旅社」は、『台湾路地裏名建築さんぽ』（エクスナレッジ、2020年）でも紹介されており、読み比べてみると著者の見方の違いなどもわかり、おもしろい。

ひとつの建物が10枚前後の写真で紹介されており、外見から内装、さらには見るべきデザインやポイントがひと目でわかるようになっている。エッセイでは建物のライフヒストリーを中心に建物に

まつわる話が紹介され、利活用にいたった台湾の人々の思いがわかる。

本書の最初にある「レトロ建築を楽しむポイント」の章では、「鉄窓花（窓の外側に設置される鉄格子）」、「人造石（建材の表面を美しく加工するためのもの）」、「赤レンガ」、「装飾ブロック（セメントを使ってさまざまなデザインを施したブロック）」、「セラミックタイル」について、これまた多くの写真とともに説明されている。これらの写真を見るだけでも「老屋」のおもしろさ、美しさが伝わってくる。目で楽しみながら「老屋」の建築的理解が深められるのも本書の特徴だ。

この本を読むと多くの日式建築がリノベーションされ、カフェやゲストハウス、アトリエ型店舗などに再生されていることがわかる。台湾のレトロなスポットと日本統治の歴史のつながりを知るうえで、も欠かせない1冊である。

「あぁ、台湾だ」と思わせる100軒の建物のスケッチとエッセイから構成されている。『台湾レトロ建築案内』（エクスナレッジ、2018年）で紹介されるインベーションされた建物とは違って、むしろ、日常生活に溶け込んだ、一部は都市開発の中ですくでも消えていくような建物が多く紹介されている。いまま営業している懐かしい雰囲気のお店に加え、シャトルバスの停留所、人が住まなくなつてやや荒れた住居、雑然とした看板なども取り上げる対象である。本の帯に「読んで旅するノスタルジックな台湾ガイド」とあるが、10年以上台湾に通っている人なら「こういう建物あるな」、「こんな風景、懐かしい」と本書はまさに思わせてくれる。コロナ禍で台湾ロスの方にはもっともおすすめの本だ。

台湾を感じさせてくれる理由は、絵と文を描いた／書いたスケッチ画家の著者が台湾への深い愛着を持っているからだろう。「台湾で育ち、故郷に対する思い入れがあるからこそ、より強い思いで制作できただけでなく、制作対象の範囲も広がりました」と記す。そして、取り上げるか否かのポイントは、「台湾の建

物独特の積み重ねられてきた生活感があるかどうか、またその背後に文化的な意味があるかどうか」であり、それゆえに建物自体のみならず、建物に付随する水のタンクやトタンで建て増しされた部分、店舗前のバイクなど、その細部へのこだわりが「台湾」を一層感じさせてくれる。

今年40歳になる著者だが、彼の絵と文からは、台湾の本土化を経て台湾意識が浸透した台湾社会の空気を感じる。台湾のありきたりの何も特別ではない風景こそ価値あるものだと知っているようだ。「はじめに」で本文よりも大きな文字で「世界には美しいものが足りないわけではない。足りないのは発見だ」と書いていることもうなずける。

100枚の絵と文からは台湾の人々の日常生活を垣間見ることができ、本書は台湾の人々と暮らしを知るよい入門書にさえなっている。本書を通じて名もなき名産をぜひ堪能して欲しい。

## 『台湾路地裏名建築さんぽ』

鄭 開翔 / 杉浦佳代子・訳

エクスナレッジ 2020年 ¥2,420  
ISBN: 9784767828404



## 『TAIWAN FACE GUIDE FOR 台湾文創』

小路 輔・監修

トゥーヴァージンズ 2018年 ¥1,980  
ISBN: 9784908406249



「文創」を切り口に台湾の新しい文化的鼓動を紹介するスタイリッシュな1冊。台湾のショップやカフェを訪ねて「なんて素敵空間」と思った人も多いと思うが、本書は、文創の最先端を行く50名を紹介することで、その秘密をひも解いてくれる。

32ページの「歴史を結ぶ近代建築、歴史を融合させる「文創」」で「文創」を台湾文化の要素（デザイン、習慣、建築物など）を創造的におしゃれで、モダンで、アートなものに変え、それらを活用して行なうビジネスと定義したが、ここで語れる文創は多種多様である。本書の「PREFACE」(序)では、「古き良きものから新しいものを生み出そう」と定義する。だが、50名の文創への思いはその枠では収まり切らない。たとえば、ある人は文創を「真面目に生活する、人生を真剣に生きるといふこと」と語り、別の人は「名詞ではなく、持続的に思考を反復するという動詞の状態」とする。中には自分の作品を文創に結びつけないとさえ語る人も登場する。この多様さが台湾の文創のユニークさと革新性の核心だ。

仕事、経歴、仕事や文創への思い、こだわりが、紹介する人物の似顔絵とともにインタビュー形式で紹介され、建物の外装や内装、作品（と言いたくなるグッズや料理など）について多くの写真が掲載されている。その写真だけで、訪ねてみたい、使ってみてみたい、食べてみたいと思わされるほど、彼らのこだわりが感じ取れる。

本書では台湾の人のみならず、数名の日本や香港出身の人も登場する。台湾という場に国境を越えて人が集まり、その力がまた台湾の文創に新しい躍動を生む。そのような文創の姿も本書からは浮かび上がってくる。

本書の末尾には、「台湾文創年表」があり、文創のムーブメントの歴史を知ることが出来る。文創は単に生活や芸術、映画のみならず、政治・経済とも深くかかわっている。

本書は、大日本帝国期に沖縄を含む日本のみならず、当時日本の統治を受けていた台湾、朝鮮半島、中国東北部、サハリンなどに建てられた建築物について文化人類学、建築学、社会学などを専門とする16名が、建築時の状況や利活用の現状、保存と取り壊しをめぐる争いなどについて具体的な建物を取り上げ、解説している。

本書の特徴のひとつは、日式建築が現地の状況に応じてさまざまに利用され、ときには放置される姿が見えてくることである。日本との関係が強調されることもあれば、忘却または隠蔽されることもある。たとえば、台湾東部をフィールドとする西村一之は神なき神社の再建や放置の様相を地域の政治から読み解くが、神社の扱いに対する一貫性のなさは「日本のモノを大事にしている」という単純な理解では決して見えてこない。

いまでも古蹟や歴史建築になっている日式建築だが、以前はその対象さえなかった。台湾では1982年に文化資産保存法が制定されるが、制定の目的は「国民の精神生活の充実と中華文化の発揚」であった。日式建築が保存の範ちゅうに入るのは、2005年に文化資産保存法が全面的に改正され、目的が「中華文化の発揚」から「多元文化の発揚」へと改正されてからである。

したがって、「日本」という要素は、台湾を構成する多くの文化的要素のひとつに過ぎない。日本統治は約50年、戦後の歴史は80年弱を数える。日式建築の歴史の半分は台湾の統治のもとであり、台湾のモノとして日式建築は存在してきた。日式建築は日本のモノとして語ることは決してできない。この事実は日式建築を理解するうえで重要だ。

もちろん、各国によって日式建築の扱われ方は違う。韓国では日式建築は植民地期の収奪の証であり、公的に好意的に扱われることはない。本書を読むことで台湾の日式建築を他国と比較する視点を持つことができる。この点も本書の特徴である。

## 『大日本帝国期の建築物が語る近代史』

過去・現在・未来

上水流久彦・編

誠誠出版 2022年 ¥3,080  
ISBN: 9784585325123







『台湾名建築めぐり』

辛永勝、楊朝景／小栗山智・訳  
エクスナレッジ 2019年 ¥1,760  
ISBN : 9784767826059

台湾のレトロ建築ユニット「老屋顔」の本、待望の第2弾。異国風情漂洋館、海岸に並ぶ石造りの伝統家屋、軍事施設を改装したブックカフェ……。日本人のまだ知らない離島にも足を延ばした、ディープな台湾案内。台湾リピーターにもおすすめの本。1冊。



『台湾レトロ建築さんぽ』  
鉄窓花を探して

辛永勝、楊朝景／小栗山智・訳  
エクスナレッジ 2021年 ¥1,760  
ISBN : 9784767829647

「鉄窓花」とは台湾の古い民家やビルの窓を彩る鉄製の飾り格子のこと。防犯目的で取り付けられたものだが、そのデザインは幾何学模様や山形、花、動物などじつに多彩。台湾各地の選りすぐりの美しい鉄窓花を紹介するとともに、その歴史をひも解き、製作工程や家主が込めた思いなども紹介する。ノスタルジックな台湾レトロ建築の顔ともえる、貴重な建築装飾の魅力が満載。



『書店本事』  
台湾書店主  
43のストーリー

郭怡青／欣蒂小姐・絵／小島あつ子、黒木夏見・訳  
サウザンブックス社 2019年 ¥2,860  
ISBN : 9784909125125

日本と同じく読書離れや出版不況の続く台湾では、なぜかいま、独立書店と呼ばれる個人経営の町の本屋が元気だ。個性あふれる店主たちを活写した43篇の文章からは、台湾で新たに花開いた「独立書店文化」をとおして、知られざる普段の台湾が見えてくる。本書と並行して気鋭の台湾映画監督ホウ・チーランにより撮られたショート・ドキュメンタリー集『書店の詩』へのリンクも収録。美しい「映像詩」が、見る者を台湾の路地裏へと誘う。



『台湾花模様』  
美しくつつかしい  
伝統花布の世界

陳宗萍／如月弥生・訳  
グラフィック社 2018年 ¥3,190  
ISBN : 9784766151291

大人気の台湾雑貨、台湾花布の図案を708種類紹介。世界各地からやってきたさまざまな種が混ざりあい、台湾に根をおろし、野の花のように咲きみだれる、それが台湾花布の世界。かつての日用品としての存在から、多文化の混交した台湾の伝統的アートとしての価値を認められるまでになった、伝統花布の世界をあますところなく解説する。DVD-ROMで実際の図案のJPGデータが手に入るのも、大変魅力的。



『台北・歴史建築探訪』  
日本が遺した建築遺産を  
歩く 1895～1945

片倉佳史  
ウェッジ 2019年 ¥1,980  
ISBN : 9784863102125

台北市内に残る日本統治時代の建築物を豊富な写真とともに紹介。歴史、文化、地理などの要素を盛り込み、日本人と台湾人がともに暮らした半世紀とは何だったのかを振り返る。著者が15年ほどかけて取材・撮影した本書には、政府関係機関の許らいを受けたり、居住者と交渉のうえ、特別撮影させてもらったりしたカットも多い。引き揚げ者や台湾の古老から提供を受けた貴重な古写真も収録する永久保存版。



『図説 台湾都市物語』  
台北・台中・台南・高雄

王 惠君、二村 悟／後藤 治・監修  
河出書房新社 2010年 ¥1,980  
ISBN : 9784309761367

台湾総督府、台北帝国大学、台中駅、三井物産……。台湾では日本統治時代につくられた建造物が多数現存し、当時の多くの歴史をいまも物語っている。台北・台中・台南・高雄の日本統治時代の建物を紹介し、各都市の歴史とともに語る決定版ガイド。



『TAIWAN EYES  
GUIDE FOR 台湾  
文創』

小路 輔・監修  
トゥーヴァージンズ 2020年 ¥1,980  
ISBN : 9784908406737

台湾のさまざまな業界で活躍しているキーパーソン51組に取材した、新しいカルチャーガイドブック。「歴史や文化を創造的に結びつけた産業」＝「文創」のムーブメントを切り口に、シーンを牽引してきたベテランから新進気鋭の若手まで、取材者それぞれの目（考え方）、視線（見すえる未来）を紹介。



『LIP的台湾案内  
こんにちは！  
新しい台湾』

LIP（田中佑美、西山美耶）  
リトルモア 2016年 ¥1,980  
ISBN : 9784898154359

台湾と日本を行き来しながら両国を結び「台日系カルチャー」を発信する日本人男女ふたり組「LIP」。Made in Taiwanの雑貨を買い漁ったり、居心地のいいカフェを探したり、個性派書店をめぐるたり、環島（台湾一周）したり。ふたりが自分たちの足で歩きまわり、地元の人との出会いやつながりから発見した「現在進行形の台湾」を紹介する。王道な台湾では終わらない、ローカルでディープな情報が満載。



オンデマンド出版  
『植民地建築紀行』  
満洲・朝鮮・台湾を歩く

西澤泰彦  
吉川弘文館 2021年 ¥2,750  
ISBN : 9784642757300

旧満洲、韓国、台湾に建てられた日本の植民地建築。それらは「負の遺産」として取り壊されたもの、庁舎や博物館に転用されたもの、文化財として評価されたものなど、それぞれの道をたどり今日にいたっている。戦争の記憶を伝える植民地建築の現在を見ながら、建築が支配に果たした役割と、現存する植民地建築の役割も踏まえ、その歴史的意味を考える。



『台湾旧神社故地への  
旅案内』  
台湾を護った神々

金子展也  
神社新報社 2015年 ¥2,640  
ISBN : 9784906128028

日本統治時代、台湾にも土地守護神として神社が造営された。終戦とともに神社は取り壊されたが、現在もわずかに遺跡が残る。本書では、神社跡地近辺に残る遺跡および遺構を紹介。一般のガイドブックではあまり紹介されていないスポットも網羅しつつ、日本人にとっての神社の存在意義、台湾の歴史の1ページに残しておくことの意義について考える。



プラス  
『Pen +』  
台湾カルチャー・クルーズ  
写真／デザイン／建築／アート  
／食／映画／音楽／文学

MEDIA HOUSE MOOK  
CCCメディアハウス 2015年 ¥1,100  
ISBN : 9784484147130

入り組んだ路地を歩き、おいしい食を味わい、温かな人と出会い、さまざまな言葉を交わす。台湾を旅すれば、そんな何でもない時間が記憶に残る。さらに熱量あふれる台湾カルチャーの最前線に触れたなら、現地で過ごす時間がさらに充実することは間違いない。日本と台湾のクリエイターが協力して構成し、盛りだくさんの台湾カルチャーを凝縮した1冊。